月二回發行

第百三號

東京園藝社

女鑑第百三號目録

熊野御前



女子と衞生

衞生の事たる、極めて至要なり。小にしては一身一家の健全如何に關し、大にして國家の元氣の消長如何に關す。醫師の不養生といふことはあれど、健全なる精神は元來健全なる身體に宿る、されば、衞生にも公私の別ありて、惡疫の流行を豫防せむが爲に、濁渠を浚へ、疱瘡の流行するに際し、區醫をして一般に種痘を施さしむるが如きは、公の衞生事業に屬し、飲食起居を謹しみて一家の健康を圖るが如きは、私の衞生事業に屬す。私の衞生は本にして、公の衞生は末なり。如何に公の衞生をつくすも、私の衞生にして擧らずんば、衞生事業は竟にその好結果を得るに由なからむとす。家庭を司る女子、ことに衞生の事に注意せざるべからず。

京の着倒れ、大坂の喰倒れ、喰倒れ、もとより非なり、着倒れも亦取るべきにあらず。下等の女子の無智なる、惡食をなして體を害ふも、猶美衣をつけて外形をかざらむとするものなきにあらず。げにや。人は澤庵のみ嚙りても、生活をなしうべく、

牛乳、スツプを食ひたればとて、直にりの效果の見ゆるものにあらねば、知らざるものは多く食物を度外視し、何にても腹滿ちぬれば足れりと速了し、甚しきは、少し養生食ひをなすものを目して贅澤となし、れでりとなせども、知らずや、火勢を熾にせんとせば、多く石炭を要することを。碌々爲すなきの人は或は惡食にて健全なるべし。然れども、社會日新の活劇に加はり、君につくし、國につくし、腦を勞し、胸をいため、體を瘁らす人達は、最も注意して身體の榮養を取り、以て精神の活動を盛にせざるべからず、これ見安きの理なれども、昧者さとらず、而して、一旦身體衰弱するに及び、俄に養生食をなして、臍をかむもまた何ぞ及ばんや。

身體の養生とは、必ずしも美食をなすの謂にあらず、滋養物を食するの謂なり。されど、如何に滋養物を食ひたればとて、之を消化すること能はざれば、毫もりの甲斐なし、これに於て、尤も運動の必要を見るなり。されば、女子たるもの、歌舞音曲など學ばむよりは、せめて生理學、衛生學の一斑を學びて、彼物には滋養あり、此物には滋養なきぐらゐの事は、之を知るを要す。煙草は奢侈品なり、酒は人の體質によりては、少量に之を飲むは藥なるべし。潔癖は日本人の特質なれば、之を說く

の必要なければ、尤も間食ひをつゝしみ、空氣の流通をよくし、晏起をいましめ、車に乘るよりはなるべく歩行せんことを要す。

さればとて、過ぎたるは、なほ及ばざるが如し。自愛に過ぐるは、反て身體を衰弱せしむる所以たらずんばあらず。寒しとて、シャツをかさぬるは、たま〳〵以てその皮膚をよわくし、かたきもの毒なりとて、常に粥を食へば、たま〳〵以て胃の働を衰へしむ。殊に小兒をそだつるには、この注意を要す、小兒に三分の饑と四分の寒とを帶ばしむるは、反て親の慈悲なるべし、子を育つるに、誤て愛に溺るゝことなかるべきなり。

一身修りて、而る後、一家治り、一家治りて、而る後、一國治るが如く、亦一身健全にして、而る後、一家健全ま、一家健全にして、而る後、一國健全なるべし。一身の健否、國家に關すること少しとせず。今や世界は智力の競爭にして、もはや、腕力の競爭にあらずと雖も、精鋭なる智力は、健强の身體にやどる、身體虚弱なるもの、安ぞよく劇務繁職に堪へて、世界の競爭場裡にたつことを得んや。謂ふことなかれ、獅子の體、象よりも遙に小なれども、なほ能く百獸の王たりと。體の大小

は固より關係する所なしといへども、強弱は大に影響す。獅子は體小なるも精悍なるを以て、よく獸王たり。今日本國力の世界に澎張せむとするに當り、吾人の體力如何は大に前途に影響あり、而して天保時代の體格と、今時の體格と、強弱果して如何、吾人關心する所なき能はず。茲に聊か衛生を說きて、以て家庭を主る女子の注意を促すといふ。

けさみれはわらたまらさろものもなし
かみのこゝろさはろやたつらん
（水屋集）

おほきみのみよふろさしさしのには
かみよのはろのたちかへろらん

論説

家庭敎育の急要を論じて廣く日本臣民たる女子に希望す

雨後翠江

習爲性といはゞ、いと舊臭くればゆる言ながら、れよろ、人の心の上となく、人の身体の上となく、習慣といふもの、誠に量り無き勢力を有するものなり。人の起居動作、大かたは此の習慣といふものによるなり。二本の脚を、巧みに一脚づゝ踏み運ばせて、風にも水にも、容易くはうち負かされ仆るゝ事はなく、よく歩むを得るものは、やがて幼きよりの習慣によりて、かくは上手なるなり。我國の人は、脚を折り疊みて、床の上に坐するも、よく久しきまで、さむかり苦しとは

ればゐざるを、彼の西洋の人などは、片時もゐせざるを見ても知るべし。飯くふに、我國の人の巧みにつかふ二本の箸、路ゆくに、我國の人の巧みにはくなる下駄草履など彼の西洋の人は、よく穿くものもつかふ者も絶えてあらぬなり。皆やがて習慣にてろよるなれ。されど、また彼の國の人は、靴といふものはきて、足の痛むといふことを知らず、肉叉小刀の如き物をつかひて、巧みにものは喰ふなり。

嗜好の上に、思想の上に、擧動の上に、習慣は人を支配するものなることは、また著しとて、いふまでにあらねど、甘き物を好む、辛き物を好む人々の間にても知るべく、酒を嗜む煙艸を嗜むなどの上にては、なほも著しく、彼の國の人の肉食、我が菜穀を愛するなどは、殊に著しき嗜好の上に習慣にて、思想感念ともに新しういふまでにあらず。亞米利加人などの拜金、我國の愛國尊王、西洋の人の利已主義など、いろ

いろの原因もあることなれど、習慣も預りて力なからずやは。

習慣の人における勢力は、かつ〲斯の如し。細に擧げなど、洛陽の紙價も何とやらむとも形容すべきは、かゝる事ならむが。習慣の勢力は、たゞに一個人の心の上、身體の上のみに非ず、社會の思想といふものは、狀態といふものも、もと社會の事物といふものは、大に習慣に支配せらるゝものにて、社會の生存、過半は習慣の勢力に依るなりといふも、なか〲に過言にあらざらむ。

嘗て菅茶山翁の筆のすさびといへる書を見けるに、翁が嘗て江戸に在りける時、ある年の八月十四日なりき、知れる學者のもとより、食卓と小榻四つとを贈られたれど、此の具もて七寶羹を饗せまほしけれど、まゐられよと招かれけれど、ゆきけるに、折りふし雨いたう降りて、客も來らず。唯翁と他の一客とのみにて主客三人、其の榻に踞して、相對ひて久しく酒のみ興じたるが、主人の暫時とて立ち去るや、彼の一客翁にむかひて主人の見ざる間暫く榻を下りて休息せむやといひたりとて、互に習慣の改めがたきを笑ひ興じたる事ありたりといふ話ありけり。させる面白きことにはあらねど、習慣といふものゝ浸染は、容易に去りがたく、習慣の勢力の大なる事の例として見など、面白みある話ならずや。

習慣の人をやる力は、實に強くも強し、習慣の人にまとふ力は、まことに千引の岩も何かあらむ。されど、人には習慣といふものの大切のものなり。善き習慣といふもの大切なり。善き習慣を養ふといふ事何よりも大切の事なりかし。善き習慣あれど、自ら思ふ事も行ふ事も善かれどなり。

さて、人に習慣を養ふものは、何ものぞや。人に習慣を養ふ所は、何れの邊りをか、第一とは爲す。いふま

でもあらず、これを養ふは、教訓と見聞となり。これを養ふ所は、家庭のあたりころ最ならめ。そは、第一に、人の稚き時は、なほさし初めにたる若枝の如し。さまぐ\質は異なれど、總じて枝は若き時は、撓め易きものなり。縦ならしめんも、横ならしめんも、直ぐならしめむも、屈らしめむも、よらむも組まむも、たゞ撓むるがまゝなり。さらずも、たゞもわれと屈曲し易きものなり。されど木つくる翁は、若きほどにこそ、枝はつくるなれ。

枝のさまぐ\の質あるはなほ、小兒の天性のいろ\/\に異れるが如し。されど、また總じて小兒の性の移し易き事は、さながら若枝の撓め易きに似たらむ。小兒の時は、ものに染み易く、ものに動き易く、ものにうつり易し。枝は若き時につくりたる形は、老いても跡去らねごとく、人も稚きほどに染みも覺ゑも爲したる性は、年うつりても、とかくにゑ去り難きものなり。先入主となるといふも、これに近き言草なり。されど、枝も若き時の作りかた緊要なれど、人も稚き時よりの習ひころ大切のことなれ。習慣が大事なり。善き習慣を作るが大切なりかし。善き習慣をつくるは、やがて、若きよりの教訓と見聞との力なり。教訓と見聞との積もりて習慣は養はるゝなり。此の教訓と見聞との道の如何によりて、善くも惡しくも、習慣はつくらるゝなり。ゑかして若きほどの教訓と見聞とは、やがて家庭の教訓と見聞とにあらずや。されどころ、家庭の教訓は大事なりとはいふなれ。

また世の中には、やゝもすれど、知識といひ理想などゝいへど、感情ぞかりいみじきものはあらじ。感情の動く所、まことに決河奔流もたゞならず。感情の凝る所、げにや、千山萬岳もものならず。社會も國家も感情を以て團結したる所謂感情的團体といふべきぞかりなるが、最强固なり。我日本國の如し。君臣の愛は感情

的の愛なり。理屈的の愛に非ず。感情より自らこぼれ出でたる愛なり。決して、理屈を以て發明假作したる愛にあらず。故に愛や、まことに靈妙なり。深遠なり。廣大なり。强固なり、萬古不變なり。千秋不巧なり、彼の支那などの如く、朝變暮化のものとは、大に其の趣きを異にせり。これ彼が如きは、理屈を以て發明製作したる愛なれどなり。理屈を以て發明したる愛とは、君はかゝる故に愛すべし、臣民はかゝる故に愛すべしと、かゝる故といふ理屈を以て作り出したる愛をいふなり。かるが故に、君臣の愛强固ならず、不變ならず。理屈といふもの、元來確固なるものゝ如くにして、なか〱に薄弱なるものなれどなり。

されど、万事に感情を本とすべし。感情に依るべし。感情に訴ふべし。感情を以てすべし。さすれど、物總うじて强固なり美妙なり不變なり。教訓の如きは、殊更に感情的ならでは叶はじ。理屈をわげて教訓するよりは、感情に訴へて教訓するがよし。忠といふはかゝる理のものなり。孝といふはかゝる理のものなり。子はかゝる理ある故に、かくすべきなり臣はかゝる理のもの故に、かくすべきなり。臣はかゝる理のもの故に、かくすべきなりなどと、理論をわげ理論を說きて、子供の智識に訴へて、理論的に忠孝の道を教訓するが、理論的教育なり。それは强固ならねど、教育の本道に非ず、末なり。なか〱に、つとめてよく子供の感情の自らこれに動き、これに趣き、これに習ふやうなる道によらざるべからず。則ち、感情的に教育することど也。これ蓋し教育の本道ならむ。而して、彼の家庭教育といふもの、最これに適するものなりとればゆるは次號に論せん。

（未完）

女子教育一班（十二）

三輪田眞佐子

いでや進みて女子教育の方法を研き究めん。そも〳〵わが國維新以前は女學校もなきほどなれど、目下のごとく女子教育を陽に必要なりと論ずるものもなく、唯女子は家庭の見習だにあれば足れりとせしのみなるに、おのづから順良貞操の女子多かりしとおもふなり。その后文運開け行くにつれて、女子教育の必要を感じ、朝野ともに心を用ゐるより、女學校の設も多く、從ひて女教の論も盛なるに、おもひきや其の結果豫想に違ひ、以て世人の滿足を得る能はざるとは。されど國家のため女界のためこの失望を以て止むべきものかは。おのれこれにつけて

いくそたび思ひかへても國のため
　まことの外の道なあゆみそ

と詠せしことあり、讀者も同感ならん。

古人いひけらく、道は近きにありと、實にさるものなるに、今人は道としいへど非常に高尚なる理想とのみおもひ、凡人の行ひ難きものとなすめり。元來人各良心あり、至誠あり、その示導に從ひて、言行を決しなば、何の過かあらん。何の耻かあらん。故に婦道孝道あるは、他人に對する道なども、至誠をもて盡さば必ず違ふことはあらざるべし。わきて擧止動作など細末のことは、自然の法あり、これに從へば可なり、いかでか躊躇すべきものかは。勿論此の自然至誠及び良心などは、いと簡短なることなれど、これを實行するもの少きより、遂に人品に雲泥の等差を生ずるなり。あはれ天は人に上下あるを欲せざるに。將た父母はその女兒の人に勝れよかしところ思へ、人に劣れむやとおもひて育てざるに。

されど道德は人の本分を實行すれば足りぬめれど、先づ卑近なる日常の義理を實行すべきなり。蓋、人とし

生るゝものは、大概の事項はその善惡正邪のみは人の說を聞かず、敎を乞はざるも、先天的に知り居るものなり。しかるにこれを實行し能はざるは、全く幼なきときよりの習慣に由るなり。故に女子を善良に敎育せんとならば、知らしむるより行はしむることを以て、肝要となすべし。現時の女子を見るに知ること多けれど、行なふことは少し。果して知れども行はざらんか、その身に如何なる益やある。むかし宋の時代に陽明といへる學者ありて、知行一致といふ說を唱へて一派をなせり。我が國にても、熊澤了介の如きは、其の學派なりとかや。うべなり世人のこれを活學としてはむるは。なはかく實踐躬行すると共に、大義名分を以て、腦裏に銘すべきなり。しからざれば、一朝にして千歳の恨事を止むることも起らん。むかし源頼朝が兵を伊豆に集めしとき、關東の武士これに赴くもの多かりけれど、土肥實平も如何はせんと思案にくれけるに、其の妻曰ひけらく、源氏は東國の恩人なれば、今頼朝の興るとしきかば、これに從ふもの多からん。いざ良人も頼朝に味方して、晴天譽を揚げ給へやと、その言の葉より實平は赤心もて、頼朝のため忠質を盡しけりとぞ。かゝる重大なることは、屢々起るものにあらざれど、素養なき女子は、万一のときに迷ふらんかし。故に女子は忠孝節義等の本體を辨ふべし。

されど、道徳は理論を研究しもて養ひ得るものにはらず、寧ろ感情を高めてもて進むべきものなり、すなはち良人に貞操を盡すにつきても、女子は果して男子に貞操を盡すべきものとすれば、男子も女子に對して貞操を盡す義務なきものなるか、君に忠を表するは臣の分とは、果して造化の人類に命ずる本來なるかといふ如き理論のみを研究するときは、遂に西洋の倫理學に說ける如く、親の義務あるは子の權理などの如き、乾燥無味なる言葉を吐くに至るべし。これに反して楠公

が南風競はざるときに大義を唱へ、逆境に立ちて湊川の泡と消えはてしことを聞かば、いかなる懦夫も將に襟を正しうして、勤王の心を起すに至るべし。靜御前が夫義經に從ひ、風にさらされ、雪にうたれつゝ、芳野の山深くわけ入りて、千辛万苦を嘗めける後、山僧どもに捕へられて、鎌倉へ送られ、遂に頼朝より脅迫を蒙り、涙の袖をしぼりつゝ、鶴岡の祠にて舞ひけるときも、頼朝の怒を憚らず、良人を慕ふ曲を歌ふ心の切なさたとへんにものなきよしをきかば、凡婦も將に同情を顯はすならむ。誠に女子を教育せんとするものは、こゝに心を用ひでやはあるべき。徒らに理論のみを説きて道心を喚起せんとするは、益なきことゝこそ言ふべけれ。殊に女德はわが國情と一致すべきものなれど、理論のみによるときは、國体に戻り、國風に違ふこと多からん。されど主として、感情により以て女德を養ふべし。



熊野御前

鹽井ふく子

松はみな常磐に、梅はみな芳はしく、竹はみな直く、鶯はみなよくうたふは。何の故にもあらず。松となりては常磐にして、常磐ならざる事能はず、梅となりては芳はしくして、芳からざる事能はず、鶯となりてはみなよくうたふ、歌はざる事能はず、これ皆生れながら有せる天性なればなり。さらば、人は如何なる性ぞ、もとより善なるが性、仁義禮智信をそなへたるが性、君となり、親となりては、もとより惠ならざる事能はず、慈ならざる事能はず、臣となり、子となり、弟となりては、もとより忠に、孝に、悌ならざる事能はざるが性なり。然るに欲といふ淺ましきもの〻加はりて、

天性を失ふものゝあるは、草木禽獸に對しても、誠にはづかはしき事ならずや。

東海道筋、天龍川の東岸に、池田といふ所あり、此所は熊野御前の故郷なりとて、水の流れと共に、その名のなほ流れて聞ゆるは、そも如何なる事のありしにやと、その源を尋るに、誠にめでたく、かぐはしき至孝の女子なりけり。

熊野は、池田の長者の娘にて、歌舞音曲に妙を得たるものなりき。その昔平家の、世に時めける頃、京に出で、内大臣平の宗盛に仕へて、ならびなき寵をかうぶりてありけるが、一朝、ふと、池田に殘れる熊野が母の、病にかゝりて重きよしを、告げこせしに、熊野はおどろきかなしみて、すぐに宗盛に向ひて、その由を告げ暫時看護のため、いとま給はれかしと請ひけれども、宗盛は、二つなく目出らるゝ心に、館をばはなさじとて、ゆるさゞるに、熊野はかなしく覺えて、再び、三度、遂には幾度となく、頻りになげき聞えて、いとまを願ひたれども、宗盛はあくまでも別を惜しみて、ゆるさゞるほどに、子として親の疾病をとふ事の叶はざるを、熊野は深くもかなしみなげき、母の樣子のきづかはしさに、故郷の空をのみ眺めては、そこがれくらし、魂魄のみ、まなく、ひまなく、母の病床をおとづれしもあはれや。さても宗盛公、人の性ありしものなるか。孝女が親を看護せんとて、思ひに思ひ、あこがれにあこがるゝものを、唯已れが、姑息の愛情に引れて、孝女が赤心をかへりみざる、かくても萬乘の至尊をたすけまつりて、人民を撫育せんとするか。

平氏の亡びしは、誠に清盛が暴逆に出るのみにはあらず、宗盛が不德の致せし所も多かり。如何に清盛が、暴惡なりしとて、宗盛もし、兄の重盛の心の半ばだにもちて、父を諫め、人民を撫でなば、いかでか、さばかり容易く亡びんや。唯官位をむさぼり、富貴をたの

みて、天下の大義をも忘れたりしこそあさましけれ。熊野は親を思ふ心の一筋に、胸もふたがりて湯水をも口にせざるに、宗盛はつゆその心をくまでありけるが、折しも彌生の頃とて、吹く風ものどかに、花は紅に、柳は綠なるまゝに、櫻にあこがれ、蝶にさそはれて、酒宴の席にさへ召し具して、諸共によろこび興じ、魂も心も身に添はざる熊野に、飲めよ、うたへよと強ひらるゝ、宗盛公の、心の中こそあやしけれ。蝶ならで舞ひもせむ、鳥ならでうたひもせむ、人の人たる性を具へたるものが、親の病をよそにして、何とて花にくるはん、酒によはん。氣はいよ〳〵しづみ心はますますきえて、君の寵も、花の盛りも、今は身にそはざれど、命なれど止むを得ず、扇をぞとり上げて、つと立ち上れど、そや、熊野が舞ふなり、うたふなりと、どつとはやし立てしに、

いかにせん都の春もをしけれど
なれし東の花やちるらん

と、あはれにも、且つ歌ひ且つ舞ひ、終りて、今はえたえず、身もうくばかり泣きしづみしに、風も心ありてや、さつとふき下ろしきて、花はあられとふりかゝりぬ、情を知らぬ宗盛公も、流石にあはれなるふしの身にしみにけむ、此處に初めて夢もさめ、其心をあはれみて、その座よりいとま給ひければ、籠の鳥の空にはなれたる心地して、あつく禮をのべつゝ、いそぎ故鄕なりける母をとひて、衣帶をもとかず看護したりと云ふ。

あはれ、宗盛公は暗弱の將なり。さるに一首の歌、よくその心をうごかしたるは、孝女の至誠のいたす所にあらずや。そも人民の師範ともなるべき上の人は、善をすゝめ、惡をしりぞけ、忠孝の道は巳れよりすゝむべきに、清盛と云ひ、宗盛と云ひ、不德の人、二代相つぎたれど、その滅亡をいたせるも怪しむにたらず、

あはれや、榮耀極まりなかりし平家も、暫時にして跡方なくなりしを見ても、富貴は風前の花、たのまれぬものなり。天龍川の水と共に、今も流れて、かぐはしき孝女がむかしの赤心を汲みても、をしむべきは名にして、名の實は忠孝にありといへる南谿子がむかしの言の葉も、まことに、道理とぞ覺ゆる。

三輪女　　山川清素

一年二年のほどならましかど、堪へもすべく、忍びもすべき節義貞操。それすら、人まへを飾ることのおほき世に、赤心をこめて盡すことの稀なる中に、これは又花にもたとふべき十八の身をふり捨てゝ、十年二十年三十年の久しき年月を不治の病に動きもならぬ夫の側にかしづきて、終生の身のいたづきも知らぬ顔に、百年の憂目も昨日今日のさはらぬことのやうに、心得て、唯ひたすらに夫の喜色を見てよろこび、憂色を見てうれひ、六十年の久しき一日もかはらざりし貞女ありけり、あはれ、この貞女のおもかげ、是を世の鏡として其に似たらむを求むるに、古今をとほして比ぶべき影の見えぬぞ口惜しき。

花にたとふれどやう／＼咲とゝのひたるばかりの姿のそれも山吹の艶なるのみの色にはあらで、花さへ、香さへ、はたその實さへ、めでたく、かぐはしく、加ふるに凩のすさぶ中にもほゝゑみ、吹雪のあるゝ内にも香ふ梅にもたとへて、猶あまりある貞女は名を三輪と呼ばれて、出羽國苅安賀村の農安右衛門といへるものゝ妻なりきとぞ。

安右衛門二十五才の頃より、痛ましくも不治の疾にとりつかれて、腰かゞみ、足たゝず、世には猶十九にぞ満たぬいとしき妻を持ちながら、朝夕病蓐に呻吟ひて吾と吾が身のいきがひなきをかこち、なまじひに、在りて益なき命、何とて神はかゝるわが身をいかさせ給

ふ。はやく殺したまへ、死ねかしとばかり、身をもがきて世を敢果なむるに、いつもかはらぬ三輪女はは丶とばかりうち笑みて、あなをかし、君の又もか丶るたはむれ宣ふことよ、此の風もなく波もた丶ぬうれしきわが家にさるやくなきことはふつに止め給ひて、今日もいとう暖かきに、はし近ういざり出で給ひて、ぬし待ち顔に咲きは丶ゑめる梅が香なりともめで給ひね、などいろ〳〵とまめだちていひなぐさむるに、いたはしや姿さへ心さへかくまですなほにやさしきわが妻をあるべきことかあるまじきことか、夫の身として百年の契もうれしとおもはすることは絶てなく、おり〳〵おもひあまりてふと口走るわがくり言をき丶つけては、火にも水にも心を配るいとはしさ、さても吾が身はいつまで斯くてありふることぞと心常に安からぬ安右衛門、おもはず聲をのみてうちひそみたる事も幾度。」掬へは水中の玉の如く、むすべど溪間の清水のごとき

三輪女の心は、其の夫に向ひて清く美しきのみならず。隣里郷黨に向ひてもおなじく惟謙惟遜の間に愛嬌の露をこぼすに至りては、男女老幼誰とて感動せられざるはなく、家より家に、人より人にたゞへあはされて、一郷一村擧げて其の温徳高風に化せられざるはなきに至れりきとぞ。

時として人の家に祝ことなどあるをり〳〵は、必招かれて、三輪女の影なくては物足らぬとまでもてあがめられつ。さらでも天性やさしき三輪女は人によばれては、ありがたし、かたじけなしとうれしげにうちゑむばかりにて、中々に人の上に座り自高ぶるなどのなきはいふまでもあらず。

かくまでに、やさしき姿と、すなほなる心とを備へて、生れいでたる三輪女、人の道女のつとめに至りては一として、とり調はぬ所とてはなきに、打添へて文よみ、手かく業さへたど〳〵しからず、里の娘子供を手許に

敎へて、倦まず、怠らざりしとはそれむかりにてだに、たふとく、ありがたきに、まして俳諧の道にも分けいりて、をりにふれ、ことにつけての秀句佳吟も少なからずとききては、一しほなづかしさ、ゆかしさのおもひ、たちそふべくや。

夫は世を捨てたるもおなじ境遇に沈める身なるに妻は日夜家のなりはひにいたづきて、獨心をおひつかふを見るにつけても、他日には花のさかりの此の朝夕、かなしみこそ、絶えざれ、なに樂しきことのあるべき、さても木にもあらぬ石にもあらぬ物の情も知れる身なるべきにと取越し苦勞多き世の中に、あらぬ浮名を立てらるゝは、珍しからぬ例とて三輪女も誰がいひそめしたわ言ならん。あたし男と言ひ契りて、竊に夫の眼をかすむるよし安右衛門の耳に聞えたるに、人情これむかりはおもふいとまのなきが常とて、安右衛門、怒の心炎ともなり、くやしの思、火ともなりて一家の和合之より亂れ初むべきなれども、さるけしきのあらぬのみか、年頃日頃そひ遂げて何ひとつそむきたることなきいとしの妻いかで、吾が眼をしのぶなどの振舞あるべき、おのれの心は妻やしるらむ、妻の心何とて吾が知らざらむと氣にもとゞめず、心にもかけざりしことは流石比翼連理の契なりけり。

帷子やうらなき心つまに見せ

とは夫に疑はれざる嬉しきあまり口ずさみて夫におくりし一句なりとぞ、搖がしていよゝ美しきは三輪女の心のさゝ波や。

晩年に至りて城主臘山公の儒臣細井平洲先生、三輪女の名をきゝ慕ひて近く召し寄せられくさ〴〵の物語せられたりとぞ。

返り花咲くや日の恩地の恩

これはこの時うれしきあまり、先生に送りたる三輪女の吟。

雪をはらふ嵐の風のさむけさに
　　松の緑の色も一しほ
これは此の折ゆかしきあまり、三輪女に與へたる先生の詠。げに二十年三十年の長きうき年月、其の間には地を卷く嵐の幾度三輪女が身にかゝりし、土をうづむる吹雪の幾度三輪女の肩に積りし、このうき辛き世の中も忍は何の御空を渡る春風はかりの世とればねて、今こゝに六十路の齡を樂山公の治下に保ちて、やう〳〵現はるゝ頭の雪、ろれも松の緑の色に比べて一しほの操、一しほの貞、猶三輪女のをり〳〵毎に詠みいでけむかず〳〵。あつむれどれはかるべく、求むれど見出づべけれど、其のたつきなきをいかにかせん
　身の垢は流れにすめど田にしかな
濁りなき太平の世に生れあひても、れろかなる身はれろかたるを免れずとの意なるべけれど、中々に潛むとすれど現るゝ夜光の珠にも譬へつべきは三輪の心や。
　白梅やまた一つはせ〳〵
御仁政の日々に新なるをあふぎてと、前書してよめるもの。
　藻の花や世の浮きしづみ咲きて見せ
　實のならぬ名荷の花やもの わすれ
二つながら子弟を誡めむとてよめるもの、再三よみ味ふれど何れも限りなき清洒のうち、いふべからざる妙趣をさへ掬するを得べし、あはれ三輪女はこの道にれきても尋尋一樣の者流にはあらざりけり。
あはれかくぞかり、香あり、花ある人のれもかげ、今はろれに似たらむをだに、尋ねむとれもへどろれに似たらむもの、得がたきのみならず、此の頃の世の常とてかゝるたぐひは夢にさへ、入り難く、唯うつゝに見ゆるは、あだに咲きて、あだに散り行く名荷の花のごときのみなるぞ頼み少きや。



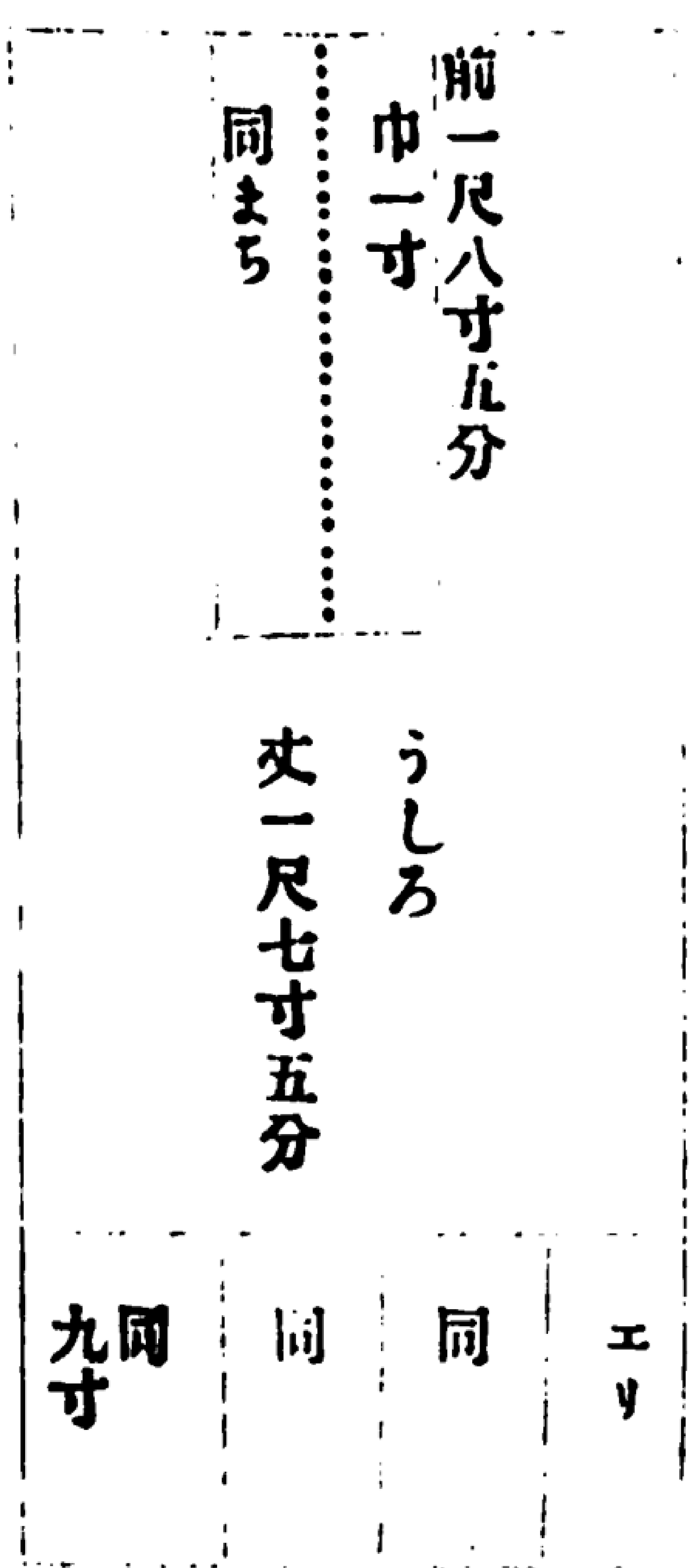
たちぬひ

西山たい子

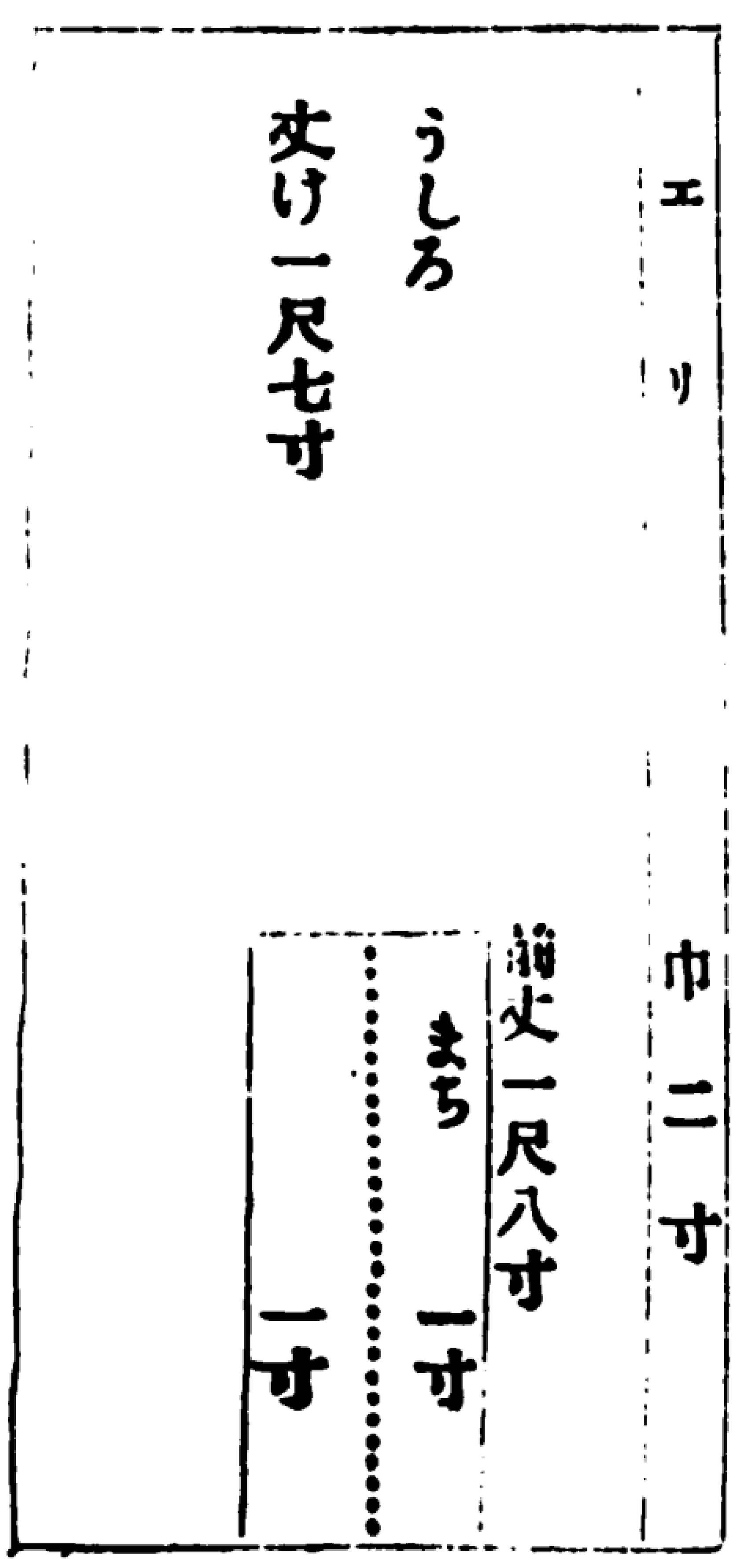
(廿三)一ッ身袖無羽織の裁ち方

一ッ身袖無は、四尺五寸あれど、かなり大きく裁てるものなり。まづぬひ上りの身丈だけをはかりて、前下りと襟方との一片だけを加へて、それを二つにわりたるものに、一寸ばかり加へたるものを、最初にきりて、そのきりたるものを縦てに四つわりになし、さて、はぎて襟となすべし。殘りの切れを縦に眞二に折り、その折りたるものの一方を、一寸ばかり長くして、また横に二つに折り、その横に折りたる所を、一寸だけ襟形に切りて、それより、長き方より眞直に一寸だけかきとるべし。そのかきとりたるもの、袋になり居る所を、切りはなして二片となして、それを兩方のまちとすべし。一寸だけかきとりたるあとの物をひろげて、身衣とするなり。前圖を見合すべし。

一ッ身袖無羽織裁方の前圖



中巾物ノ裁方
後圖



縮緬の中巾ものなどの一尺二寸あるものは、身衣の腋より、最初に二寸ばかり襟を切りとりて、殘りを前の如くに折りて裁ちて、身衣となすべし。後圖を見合すべし。これ等は、三尺五寸ばかりあれば、大きぶりに裁てるなり。裏は表よりの返りを見て、このかへりだけ短きものにて宜しきなり、また、まちは表よりとりたるもののみにて足るなり。

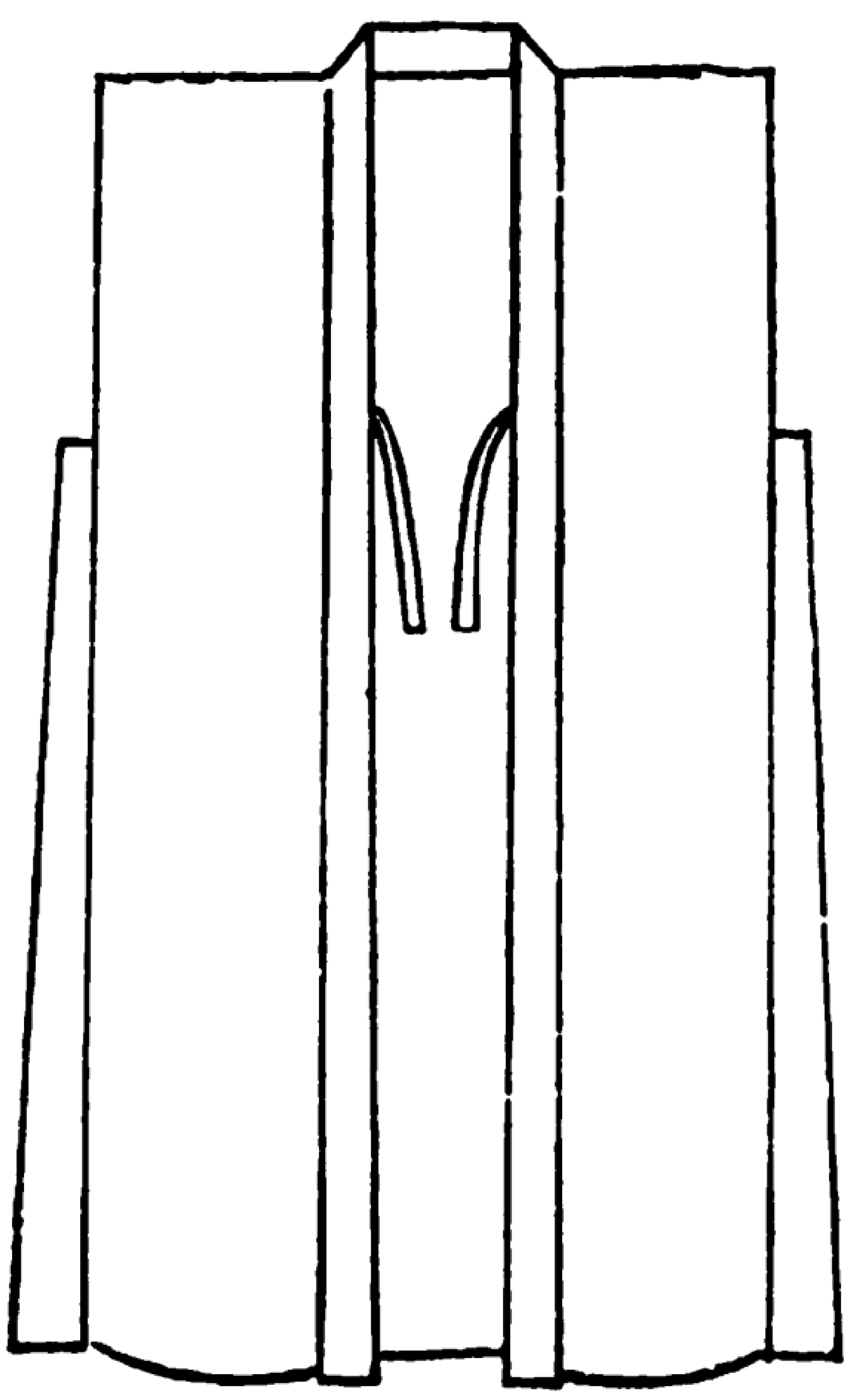
寸尺等は圖の中に記るしおきぬ。

（廿四）この縫ひ方

まづ身衣のぬひ上りの丈を、何尺何寸と見て、後も前もしるしをつけ、あまりたる長きものだけを裏にかへして、まづ後身衣を裏表合せ、これより前身のわきの方を、丈くらべのしるし糸より、三分下げて、しるしを付くべし。これは、裏へかへる所なり。それよりまた下り三分に、ぬひこみ二分を加へたるもの即ち五分だけを、またはかりてしるしを附くべし。又前の方の襟のつく方にも、丈くらべのしるしより、三分の所に、しるしを附くべし。これは下りになるなり。これより、又三分の所にしるしを附く。これは裏にかへるなり。また二分としるすべし。これは縫ひ込みとなるなり。さて、しるしをつけ終らば、前の方の二分としるしたる所より、わきの方五分としるしたる所までを、眞直に折りて、前を二分、わきを五分と、筋違に條を付けてぬふべし。それにて、前下りは出來たるなり。兩方ともさやうになし終らば、前身のうら表を合せ、わきあけ下よりまちをつくるなり。まち巾は、下は一ぱい、上は少しく細めにして、一つまちの一方を、後身につけ、一方を前身につけて、縫目を、兩方とも身衣の方へかへすべし。兩方ともつけ終らば、紐付けを、大方腋明ほど下げて、ち又は紐のいづれにても、裏身の方へつけ置き、襟をも、また裏身の方へ、丈くらべのしるしの所まで、縫ひ付くべし。それよりうらがへして

たゝみて、例の如くにして、綿を入れ、ひきかへして腋をくけ、襟をも表の方へかへしてくけるなり。前下りの早く出來る法もあれど、まづ習ひ初めは、正式をふみ玉へ。逐ひ〳〵に說き明し參らせん。また、總て羽織の襟さきは、最初に縫ひおきて、ぬひこみは、襟をつくるときに、諸共に縫ひつくべし。圖を見合すべし。

一ツ身袖無羽織縫ひ上り



丈は一尺五寸のつもりなれど今少みじかくともよし。

このごろ

鋤柄義子

麥に轉壓車をもちふべし。もし車なくば足にてふみつけてもよろしかるべし。されど雨のふりたる後はよろしからず、これを四五度もすれば、草だちよろしく、實いりいと多しといふ。

たばこの種まきはじめてよろし、朝夕は霜おほひをして、ひる中はとりのくべし、苗地は地味よく日あたりよくて西北の風來ぬ地をえらぶべし。つゞき、さゝんくわ、もみぢ、のたぐひはこのごろ種まきたもふべし。

鶯は谷の戸をいでゝ、窓ちかき梅が枝などに來てうたふころなり。うらゝやう〳〵のどかになり、梅もさきそめて、人の心もおのづから春めくなるべし。かたくはりつめたる池の氷もとけそむるなり、「とけそむる池の氷のひまごとにうちいづる波や春のはつ花」といひけんもこのごろなるべし。都にても龜戸の臥龍梅をは

じめ、向島の百花園などとふ人も多かるべし。
さて早茄子このごろ種をまけど、四月に花ひらき五月には實を結ぶべし。
竹をうゝるには五月のころをよしといふ說もあれども、このごろ去年の新根をうゑれけど、今年竹のれふるなり。
松の苗うゝべし。又にはの櫻草うゑかへてよし。
十一日は紀元節なり、この日は皇祖神武天皇中國をうちまつろへたまひて、大和のくになる橿原の宮にて大御位につかせたまひし日にして、始めて元年と記されし日なれど、紀元節とは申すなり。かくいとれもくうれしき日なれど、盃をとりあげていはひ奉るべきなり。
このごろ、杉、檜、うるし、はせの實まくべし。かや、もみ、うゑかへてたまふべし。
すぐり、桑のさし木うゑかへてよし。春はやざきの草木のたぐひ、柳櫻もうゑかへたまへ。



日本文典（四）

約音

これは、二個の音が縮まりて、一個の音と成るものにして、其の二個の音の中、一個の音は、多くは阿行の五音（アイウエオ）にして、而して、其の約りて發する音は、必ず其の音と同行の音なり。例へど、

　ありそ越す波はかしこししかすがに
　　海の玉藻のにくゝはあらぬを

といふ歌のありそといふは、あらいそ（荒磯）の約まれるものにて、「ら」音と「い」音とが結合して、「り」音と成れるなり。「ら」音と「い」音とは同行の音なり。即ち、同じく良行の音なり。皆斯くの如くにて、決して、其

の約まるや、其の行を異にせることなし。あらいろ(荒磯)があしそといふやうに、「ら」音と「い」音とが「し」音に約まるやうの事はあらず。

略音と約音とを混同すべからず。略音といふは、一個の音が、全く捨て去らるゝなれど、約音といふは、音が約まるものにて、二個の音が相重りて、一個の音に約まりて發するなり。前者は略かるゝにて、後者は約まるなり。此の區別よく〳〵考ふべし。

約音は、隨分と數多あるものにて、殊に、或音と「ア」音との重りて約まること多し。例へば「にある」が「なる」となり「てあり」が「たり」と成り、「きあり」が「けり」となり、「たゝきあひ」が「たゝかひ」と成る如し。

或は、

仁德天皇の御紀に、

はしだてのさがしき山もわぎもこと
ふたり越ゆれどやすむしろかも

とある「わぎも」は、我妹(わがいも)の約まれるにて、

或は

夫木集三十三に、

ひとの國に織るてふはとりつたへても
あやしやいかに此處にしも着る

とある「はとり」は機織(はたおり)の約まれるなり。

二個の音の約まるや、其の中の一個の「ア」音に非ざる時は、例へば、後撰集に、

風霜にいろも心も變らねど
あるじに似たる植木なりけり

とある如き「あるじ」は「ありぬし」の約まれるにて、

また、信明集に、

神代よりいむといふなるさみだれの
こなたに人を見るよしもがな

とあるこなたの如きは「此のかた」の約まれるなり。

かゝる類は多からず。

延音

これは、また前の約音とは反對にて、一個の音を延ばして、二個の音となすにて、其の延ばすや、二個の音の中の上なる音は、必ず本の音と同行の第一音なり。而して、其の下に來る音は、多くは、もとの音と同段なる所の加行の音、佐行の音、波行の音となり。例へば「いふ」を延ばして「いはく」といふを見よ。「いはく」の「は」は、「いふ」の「ふ」音と同行の音にして、また、「く」音は「ふ」音と同段なる加行の音なり。其の他にも、あまたあれば一ッ二ッ擧ぐれば、つむ(摘む)をつますといひ、しらぬ(知らぬ)をしらなくといひ、まをす(申す)をまをさくといひ、おもふ(思ひ)をおもへらくといふ如き類なり。

此處に、たゞをかしきは、例へば、萬葉集の六の卷の歌に、

世の中は常なきものと今ぞ知る
ならの都のうつろふ見れば

などいふ如きうつろふといふ語なり。これは、うつるといふと、意味は同じなり。されば、うつるといふ語を延べたるものなるかといふに、さにもあらざるやうなり。如何となれば、もしうつるの延びたるならむには、普通の規則に從へば、うつらふといはねば成らず。されば、うつらふにあらずしてうつろふなり。これをかしきことなり。或人は、これをも延音の中に擧げたれど、思ふに、これは、うつるとは同意にして別なる語ならむとればゆ。うつるの延びたるには非ざるべし。

音便

音便とは、例へば、白きを白いといひ、或は白くを白うといひ、或は、思ひはかるを思んばかるといひ、或は、もはらを專らといふ如き類にて、これかれ連合せる音をよぶ時に、其の連合せる音の中の一個が、或は他の音に變じ、或は撥ね、或は促り、或は別に一種の

音を添へるなどをいふなり。それを一ツ〳〵區別していへど、五種に大別せらるべし。

第一、　他の音に轉ずるもの

例へば、黑きを黑いとよび、黑くを黑うとよぶ如く「き」が「い」に轉じ、「く」が「う」に轉ぜる如き類なり。これに二種ありて、伊音便宇音便とよぶ。

(一)、　伊音便

といふは、「き」音と「し」音とを轉じて、伊音に響かすをいふ。例へば、

みにくき(醜)　を　みにくい
さきはひ(幸)　を　さいはひ
うまし(甘)　を　うまい
ながし(長)　を　ながい
みじかし(短)　を　みじかい
おきて(置て)　を　おいて

などいふ類にて、この音便のことわりを知らざる人は、よくおいてをおひてなどと書きあやまれる人あり。よく〳〵注意すべし。おいてといふ語は、おきてといふ語の音便なれど、必ずおいてと書くべきなり。

(二)、　宇音便

といふは、五十音の中の「か」「く」「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」「ま」「み」「む」「り」「や」「ゐ」の十三音が「う」音に轉ずるなり。例へば思ひてを思うてといふ如き類なり。

かゝぶり柳(冠柳)　を　かうぶり柳
とかくして　を　とかうして
はゝき(帚)　を　はうき
やまひのとこ(病床)を　やまうのとこ
さぶらふ(候)　を　さうらふ
仕へまつる　を　仕うまつる
なほし(直衣)　を　なうし
たまはり(賜)　を　たうはり
こみち(小路)　を　こうぢ

ひむか(日向)　を　ひうが
取りいでて　を　とうで、
まゐで(參出)　を　まうで
まをす(申す)　を　まうす

などいふ如き類にて、此の音便を知らぬ人は、よく思うてと書くべきを、思ふてなど書く人あり思ひての音便なれば思うてと書くべきなり。よく〳〵心すべし。此の字音便の中にては、「く」音の「う」音に轉ずるもの最多し。暑く、寒く、善く、惡しく、長く、短く、疾く、遲く、高く、低く、など、總じて、形容詞は、皆かく轉ずるを得ればなり。

第二、　此の音の撥ぬるもの

これは、例へば、思ひはかるを思んばかるといひて、ひ音のんと撥ぬるがごとき類をいふなり。五十音の中にて、「う」「に」「ぬ」「は」「ひ」「へ」「ほ」「み」「む」「も」「り」「る」の十二音が斯くんと撥ぬるなり。例へば、

土佐日記に

　この家にて生れしをんなごの、もろともにかへらねばいかゞあらむ

とある如きをんなごは女子(をうなご)の「う」音の撥ねたるなり。或は發心集に、

　ありき〳〵これを食ふ。わらんべいくらともなく、笑ひ侮れど、更に咎め腹立つこともなし

とある如きわらんべは童(わらはべ)のは音の撥ねたるなり。或は伊勢物語に

　まづしければ、するわざもなかりけり。思ひわびて、ねんごろに相かたらひける友だちのもとに

とある如くねんごろには懇に(ねもごろに)の「も」音の撥ねたるものなり。

はてはつき

永石德文

こは故會田安昌大人のかむがへれかれしを、ひろく世の人にもとてこゝにかゝげぬ。

佇丹集に

山がつのはてに刈はす麥の穗の
くだけてものを思ふ頃かな

堀川百首

田家

宿もせ（門イ）に朝寐稻をはすよりは
はてを結びてぞ懸べかりける

阿闍梨隆源

と見えたる、此はてと云へる物はもと農夫などが稻穀類を懸乾す爲に、木を立て繩もて結構へたるを云へりと思はる。又はつきと云へるがあり、そは空穗吹上の上卷に、『はつかなるあまの魚どもあまた懸てはすはつきしてもほしたり』、

散木集　夏

卯の花の垣根なりけり山賤の
はつきにさらすけふも見つれど

永久四年百首　泉郎兼昌

ぬれ衣今ぞはつきに懸てはす
かづきしてけりよさの海人

拾玉集四

あさてはすはつきの枝にゐるもずの
しづかならずや賤が庵まで

夫木鈔雜十七、永承五年十一月後綱朝臣家の歌合

能因法師

もしはやくあまの濡衣はす見れど
磯邊の松ぞはつきなりける

袖中抄に『下人の物など懸て曝す木をはつきと云なり、枝ある木二本を柱に立て、其枝に横ざまに竿の樣に木

を架して、夫に物を懸て曝すなり、縄もて引渡して物を懸るなり」など見ゑて、はてと云へると同物の如く聞ゑたり、按ふに類聚三代格巻八、承和八年、閏九月二日、符云、應下設二乾稲器一事大和國、宇陀郡人、田中構木懸二曝稲穀一、其穀之燥、似レ當二火炎一、俗名謂二之稲機一、今諸國往々所有レ在焉、宜下仰二諸國一廣備中此器上とある、此稲機形に似たりしならむといひし物、後には唯はたる（曾丹集のイ本にはたゝあるは其證とも云ふべし）とも、又はてとも云ひしを夫木もて立構へたる物なるから、はて木とも云けむを音の通へる儘にはつきと云ひならしもて、來て、其所々海邊にも山邊にも造設け、便にまかせては穀類のみならず他物（布衣爪などの類）をも懸曝せりしなるべし、されど一物両名の物と思はるゝなり。

漫録

れきの玉藻（五）

永石德文

隨年教法

六歳（中略）此年頃より、尊長を敬ふ事ををしへ、尊卑長幼のわかちをもしらしめ、言葉づかひをもをしふべし。

七歳（中略）此頃小兒の少知いでき、いふ事を聞しる程ならば、其知をはかり、年に宜しき程やうやく、禮法を敎ふべし。又和字のよみかきをもならはしむべし。

八歳（中略）はじめて幼者に相應の禮義ををしへ、無禮をいましむべし。此頃より立居ふるまひの、凡尊長の前に出、物をいひ、いらへ答ふる法、饌具を尊長の前

にすゑ、又取て退く法、盃を出し、銚子を取て酒をすゝめ、肴を出す法、茶を進る禮をもならはしむべし。又みづから食する法、尊長の賜はる盃と肴をいたゞき、客の盃をいたゞき呑む法、尊者に對し拜禮をなす法ををしへしらしむべし。又茶禮をもをしふべし。かしづきしたがふ人よりまづ孝弟の道を敎ふべし。よく父母につかふるを孝とし。よく兄長に隨ふを弟とす。父母を尊びてよく仕ふる、是人たる者の第一につとめ行ふべき道なる事かしづきて師となる人はやく敎ふべし。次に兄長を敬ひしたがひてあなどるべからざる事ををしふべし。兄長とは兄姉伯父伯母又いとこの內、其外にも年たけて敬ふべき人をいふ、凡孝弟の二は、人間の道を行ふ本なり、萬事の善は皆是よりはじまれる事ををしふべし。父母兄長に恐れつゝしみて、其をしへいましめをよくきゝて、そむかざる事ををしふべし。敎へをそむきては、むげの事なり。父母を恐れず兄長をあなどらばいましめてゆるすべからず。もし人をあなどる事をゆるし、かへりてわらひ悦べば、小兒は善惡を辨へずして、あしからざる事と思ひ、長して後此くせやまず。子となり弟となる法をしらず。無禮にして不孝不弟となる。是父母愚かにして、子の惡をすゝめなせるなり。やうやく年を重ねば、弟を愛し、臣僕をあはれみ、師を貴び、友に交はる道、賓客に對して、坐立進退言葉づかひの法、各々其品に隨ひて、いつくしみ敬ふ道ををしへしらしむべし。是よりやうやく孝弟忠信禮儀廉恥の道ををしへ、行はしむ。人の財物を求め、飮食をむさぼりて、賤しげなる心をいましめ、恥を知るべき事ををしふべし、七歲より前は猶いとけなければ、早くいね、おそく起、食するに時を定めず、大やう其心に任すべし。禮法を以て、一々に、責難し。八歲より門戶の出入し。又は座席につき、飮食するに必年長ぜる人におくれて、先だつべからず。

はじめてへりくだりゆづる事をしふべし、小兒の心任せにせず。きずゐなる事をかたくいましむべし。是かんにうの事なり。

(上略)始より風體正敷能書を學ばしむべし。手跡つたなく風體あしきを手本としてならへば、あしき事くせとなり、後に風體よき能書を習ふとも、移らず。始めは眞草ともに大字を書ならはしむべし。初より小字をかけば、手すくみてはたらかず。又此年より早く文字をよみならはせ、しらしむべし。(中略)文句ながき、むづかしきものは、初めよりよみがたく覺えがたく、たいくつし、學問をきらふ心つきてあしく、まづ文句短くして、讀やすき覺えやすきものを、讀せそらに覺えさすべし。

(貝原益軒翁兩葉支鑑)

＊　＊　＊　＊　＊

謙信春日山居間の壁書

一　心に物なき時は心廣躰ゆたかなり
一　心に我慢なき時は愛敬を失はず
一　心に慾なきときは義理を行ふ
一　心に私なきときは疑ふ事なし
一　心に奢なきときは人敬ふ
一　心にあやまりなき時は人畏る
一　心に貪なき時は諂ふ事なし
一　心に怒なきときは辭和らかなり
一　心に堪忍有るときは事をとゝのふ
一　心にくもりなき時は心靜なり
一　心に孝行あるときは忠節あつし
一　心に自慢なき時は人の善をしる
一　心にいやしからざるときは願ひ事とゝのふ
一　心に邪見なき時は人をそだつる
一　心にまよひなき時はひとを咎めず

こゝろのかゞみ研ぎすまして、つねに、ちりばかりもくもりあるべからず。ものにまよひ、ことにればば

れ、よしあしをわくる見識なきは心くもりてくらければなり。耻づべきかぎりならずや。よしうまれつきさとからずとも、あけくれにたゆみなく心がけなばなどかは遂にいたらずといふことあるべき。一心岩をもとほすといへることわざうきたることにはあらず。この壁書なりといふを見れば、理りふかくして味ひかぎりなし。みな人のしれることにて、さばかりとは思えぬことのやうなれども、よくあぢはふにしからず。謙信の心おきて今更におもひやられたり。心をしづめて一々にくりかへしても見よ。人の世のことわりを明めたるにあらずば、なしえまじきことなるべし。わが心を明らかにとぎすましたらんに萬のものごと、よきはよく、あしきはあしきまゝにうつりて、いさゝかも迷ふことなかるべし。

＊　＊　＊　＊　＊

ものについであり

その子のあしきをかなしみ、朝夕せつかんせし人ありしに、或人のいへるは、其御身のわかき時は、ものごと、御おやのおほせのまゝにありしやととへるに、しばしありて、さはなくさぶらひきとこたふ。さればこそ、いやしきことわざにも年こそくすりなれと申侍れば、としたけ給ふのちには、きづかひおぼしめすほどにはあるまじといひて、その子なりし人をかたへにまねぎ、このほどみちゆく人の、言葉あらそひして、としたけたるもの[illegible]、うちたゝきなどしたるはなしきゝ給ふやといひしに、いかにもやすからずおぼえ侍るとこたふ。よそのおやなれど、年たけたるものゝ、うしとおもふさまは、やすからぬ御事なるに、したしき御おやの、あさゆふこゝろをくるしめ給ふ事、すこしの御心づきなきこそあやしげなれといひしに、はぢがはして、なにの言葉もなし、そのゝちはおやこの中、むつまじくなりたると、かたれる人あり。（たはれくさ）

れやこのなか今見るが如し、かうやうのこと世にあることなり。

見識

それがしわかき時、むさしにありしに、其比までは、人參を用ふるくすしはなはだまれなり。もしも人參を用るくすしあれど、下手なりといへり、世の人、人參の功ある事をしらずとて、杉某といへるくすし、つねにうれへとして語りき。そのゝち李士材、蕭萬與などいへるもの、方書世に行れ、けふ此頃に至りてはかろき病にも、人參を用ひざるくすしはすくなし。もしも人參を用ひざるくすしあれど、下手なりといへりさるころ又むさしにゆき、杉某にあひしに、世の人、人參の害ある事をしらずとかたりて、其事のみうれふ。徐景山が通介なりとほめけり、定りたる見識ありて世はのやりにしたがはざるこそたふとけれ。（同上）

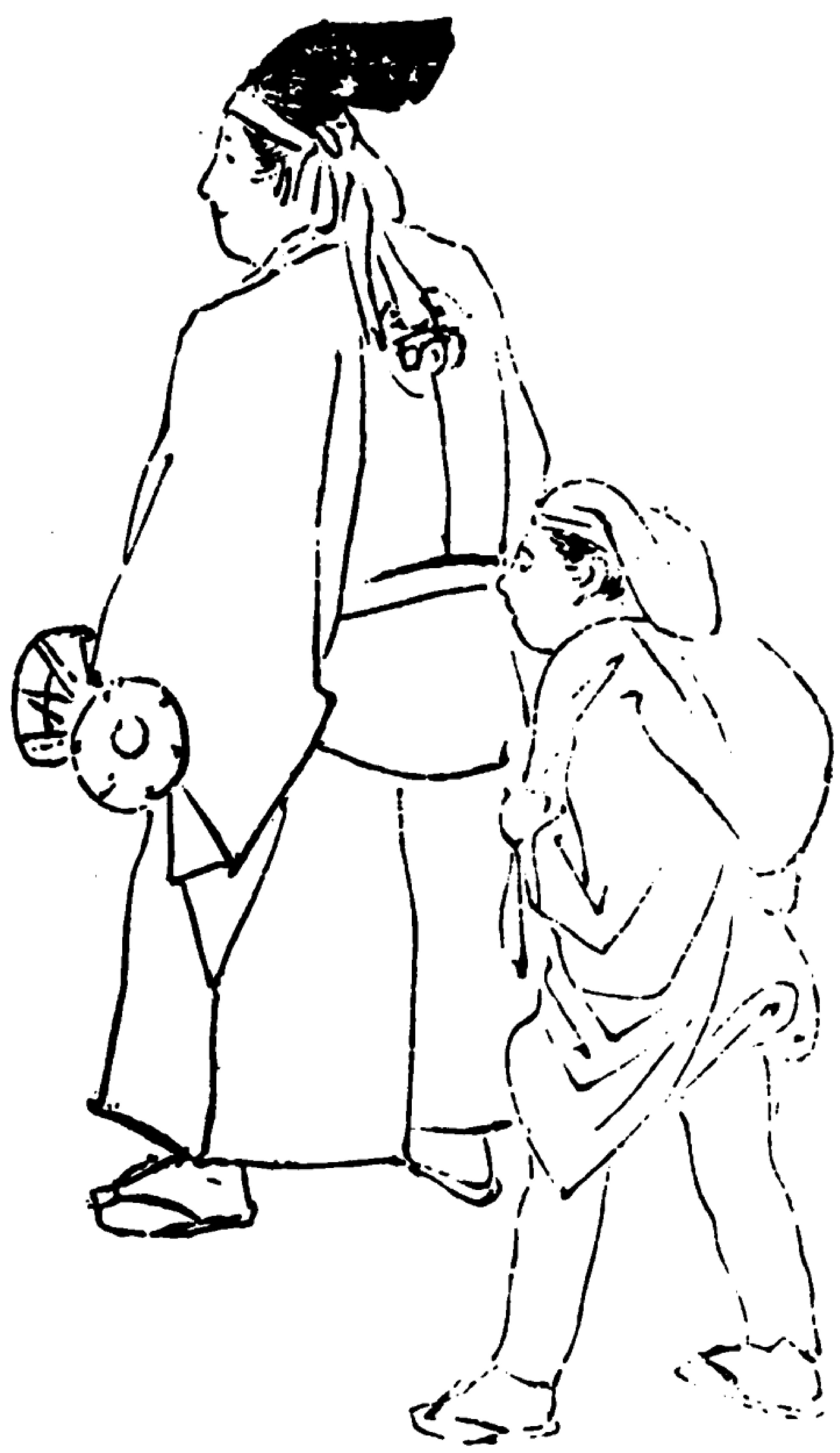
くすしのみにかぎらず、萬のことみなしからざるはなし。

伊勢萬歳

井上頼文

萬歳のことは、昨年一月の紙上に載せたれど、ふたゝび繰りかへすを要せざるべし。今、伊勢の國、山田あたり徘徊する、萬歳の服裝、東京のとは、いさゝかことやうなれど、大北淡齋子に寫させてかゝげつ。才三の冠りたる頭巾はれはかた、黑色金巾に緣は赤色なるが多し。此のあたりの人は、才六頭巾といふ。肩にかけたる袋は、祝儀にとて得たる、米、麥、豆、餅など得るにしたがひて收め入るゝ料なり。但、維新前の服裝は、これよりも立派にて、素袍の上どかりを着て、下は平袴をはきたりきと、また、謠ふ歌も、もとは質朴なりしに、近年さかしらに、新文句を挿入して、大

に古色をそこなへりといへり。かゝる謠の中には、古き傳説などの含まりたるがあれど、たやすく改め換ふるはをしむべき事なり。彌勒十年、辰の年などいふ句ありて、異年號、逸年號等の考證ともなれりしこと、山崎美成翁などのいはれたるが如し。今、このあたりにて、專ら謠ふ歌を伊勢萬歳の歌とよべり。伊勢萬歳とはいへど、此の國には、萬歳の出る村はなし。みな、三河の國より來るものなりと、橋村正璟ぬしはいはれき。今、文中猥がはしき句はおほかた省きつ。



●伊勢萬歳

御萬歳樂とや國土も豊に納りてな、ありがたかりける日の本の、かいびやく尋ねたてまつるに、いにしへ天地分れんときは、とりの玉子のごとくなり。淸がのぼりて天となるよ、濁るがくだりて地となりける、すでに陰陽わかれてのちは木火土のせいがこりかたまりては伊弉諾みことよ、混水のせいがこりかたまりては伊弉冊尊よ、このふたぞしらの御神樣が、おのころ島へとあまくだらせて、國土うみつけたまひける。はじめはあはぢのしまをひらき、次には中國四十餘國を造り出し、豊秋津とはなづけたり。次には四國とつくしの國へ、おきさど對馬をひらかれたり、合して島かず八ッあれど、大八島とはこれなりける。此ほかのしま〴〵は、皆鹽あはのこりかたまりたる國なれど、このほか山川草木におよぶ、日輪

月輪ひるご洲さのを、四人のおん子をうみたまへど、
中にもすさのをにゝぎのみことゝ申は、こゝろたけ
くもれはします、日の神天の岩戸にとぢこもられ
て、せかいはやみよの如くなり。八百よろずよの御
神さまは、これをなげきて岩戸のまへに集りてな、
うすめのみことに神樂をあげて、神をれいさめ申、さ
れど、そのとき日の神岩戸をひらき、たぢからをの
神のれん手を取てひき出したまふ。またとこ闇夜の
雲はれて、日月ひかりを照しける、なか／＼めで度
ろふらいける。さてまた御孫子のにゝぎのみこと、
ひうがの國へあまくだらせて、葦原の中津の國のあ
るじとなれど、後代永くのはじまりは、天下もさか
りたまひける八十三万六千四歳、げにありがたや土
も木も、わがれは君の國なれど、鬼のやどらんか
たもなし彌／＼御伊勢は出船入船御萬歳とは御代も
榮てさふらふ。才「黄金のしぞをもつて右りまきに

もきり／＼とうな左りまきにもそよ／＼と一役めん
／＼に萬本ぞかりのはしらをぞ、れつとり立て合す
れど一本の柱が一字の御宮并み高尾の大明神よ一二
本のはしらが二の宮と三本の柱が榊の神じや、四本
の柱が辨才天と五本の柱が津島の神社、六本の柱が
正八幡よ七本の柱が七尾の天神、八本の柱が八劔宮
よ九本の柱が熊のゝ神社、十本の柱が重郎せつ十一
本の柱とて、いくし八つるぎ熱田の大明神よ十二本
の柱とて、堀切藥師の十二神よ十三本のはしらと
て、「太三十さ六どうしんが　才「あま降らせたまひけ
るめのふいしの此御家つゞみ太「ゑんやらやあとこゆ
ふては　才「太夫さん　太「才六大きなやつをぞ立られ
ける面しろくもさふらへんど屋根をぞ則ち瓦ぶきと
も定めてはかはらなんぞに取ては、いよの國のいよ
瓦讃岐國の三年瓦、河内の國でのこうたる瓦三才て
ふじの角瓦、れかわらめ瓦よ兩方のはふの鬼瓦よ、

ふせて飾そふらへんど佛のふかれた屋根なれど、朝日さおせどにいやかに夕日さおせどかゞやくよ雨がふりても水なんなく風がふいても寶風、火をたいてもひのなんなく富や寶がみて悦ぶ、みろく十年辰巳の年つうたが生ても千年とな　太「れゝやねにこけがひよふくりもつくりぞよ〳〵永くはゆれど十萬年よ諸神の立たる此御家つゞみ　太「よふ惡じ災なんはこれをみて七里とうくへにげたもふ。
才「福の神は此方樣入萬歳候へんど扨祇此御家つゞみ太「さつかい悅びさふらひけるホゝ誠に目出たうさふらひけるつうたはふべ尻でぼんとこいたかの　太「ろの又御尻で御旦那樣の御門ぐちまたいたろのときは才　才「其又尻で御門ぐちまたぐ時で尻がつかへがつてねいちもこうちどふにもこうにもならんとての太「ねいちもこうちもならんときはどふするものだぞ才藏　才「ろの時は隣のとちべ殿もたのんでこい八べ殿たのんでこいかんねに勘七彌三郎に彦太郎やつこの彌七彌右衛門さんも賴みだいても夫でもまんだぬけんとての　太「ろれでもまんだぬけんときはどなたを賴だすか才　才「裏のかきの木のうらぶこを折てさて手木にしてれしへし押からかいたらよふ〳〵の事で御年始が相濟だ中〳〵太夫さま　太「やれ〳〵才藏はよい所をはやしたれど旦那樣のなにかの御祝ひがさらりやさつと濟だれど千年の御祝ひ。

伊勢万歳の歌謠を記したるちなみに、越前萬歳の謠歌をも記し添へつ。とは先年、加賀の國、金澤の人、杉江靜治ぬしより、れのがもとに送りこされたるものなり。此の歌の中にも、またいかゞはしきふしぶし多かれど、まづよろしと覺ゆるものゝみを摘錄して餘は割愛しつ。

一陽來復の晨、家々の門に、立寄り、新玉の千代

を書く萬歳は、東都を初め、關東邊の國々に行はるゝは、三河萬歳と稱ふるものなれど、加越能近邊は、越前地方より入來る、越前萬歳と云ふもの行はれ、其の立振舞や、初めのものに異なり、何時の頃より始まりしや、擧動紛裝の詳しきは今ここに略して、其の謳ふ謠の一二を記す。

越前萬歳七福神

金澤　杉江破鐵

とくわかに御まんざいとやありがたかりけるきみがよに。さてもめでたきえんりきの。こゑたかさでとはりあげて。このはつはるのぎよけいには。七ふくじんのかみ〴〵が。むりやうのたからをあたへんと。まづぐわん日のあしたより。たからのふねにはをあげて。れの〳〵とりそへ給ひつゝ。よろこぶみなとへつき給ふ。まづ一ぜんの御ふねに。大こくてんのでざぶねに。うちでのこづちをふりあげて。うちだし給ふたからころ。むりやうはうじゆのたからとて。めんこうふはいのろのひかり。りうぐのえろにもたへがたき。よぶこの玉はひかりいで。へんくわの玉はなをあぐる。われらの玉もよな〳〵に。しずのいねをぜいだすゆゑ。きんのたまとぞなづけたる。よくにはひかるめの玉の。きみがみのうへよいように。こちのたからははまぐりの。れいへふだいのえろねずみ。ちうのこゑれもたかゝらん。二ぜんの御ふねに。ときにのりだすわかゑびす。つりざをとつてかひ〴〵し。げにもめでたき大だいの。びん〳〵はねる一もつを。にしのみやにてつり給ふ。さいぜのさをもびん〳〵と。なにをみかけてつり給ふ。としもきりやうもいとひなく。大だい小だいもんぜだい。さかねさかゆるさくらだい。一たい二たいがぜだいから。(中略)ながいはなげでとんぼつる。ひとをつるのもえようぜいの。あきなひがみの御りえやう

と。さかえをいのり給ひつゝ。三ぞんの御ふねに。みるにふく〳〵あらはれて。はらの大きなはていぶま。大きなふろくのろの中に。むりやうのたからをれしこんで。わけてゆくすゑはんじやうと。こどもたくさんこだからに。大ぜいつれてふなゆさん。うちのないぎもふなゆさん。まいねんこだからつくりぞり云々

げにとれもへば

三輪田眞佐子

鹽井ふく子の君には、れのれが老のくりごとを煩はしとも思ひ給はで、小石川なるいと遠きところより、れのれがもとへ詩經などを學びにとて、來り給ふこと、毎週四たびなるに、如何に雨ふらんも風つよからんも、一度だにかきしことなかりけり。今樣の女子たちは目前の榮華をのみむさばるもの多きに、君には裝などに心を用ゐたまはず。たゞ學の道にのみ深く心を入れ給へる、わが女子界のため、いよ〳〵末たのもしう覺ゆるに、過ぎし日述懐とて、

玉ぼこの道の一すじたどりてぞ
　春ならぬ日ものどかなりける

れのれこれを見て、君にはまだ春秋にもとめるに、かかるみこゝろがけありと感じ入りぬ。

すめらぎの道たゞ一つこをれきて
　あだし小徑によらめやも人

玉ぼこの道たどる身はとこしへに
　こゝろの春やのどけかるらん

井蛙小錄

井上頼文

白馬臺の雪

橘洲

こゝろあひの友、ひとりふたり例のつどひて、埋火の

許にすこし春あることゝちすれど、こよひは霰まじりの雨降りて、ことにさむしや、常陸の君のかはぎぬもがなとうちわぶるに、かの裘まゐらせんとて入きたるは、是も高陽の何がしなりけり。よき酒ありや。夕さり得たる裘とてとう出るを見れど（中略）よくものしてよなどいふ〳〵、ひともじよ、大根よとからみてふものまで、とり〴〵にものすとて、火たきやのつかま木、雨にぬれて煙うるさしとわぶれど、大盤所のれもの〻具數たらはず。女房たちいかゞなどたはむれて、かつのみかつくらひつ。はては腕枕してこの樂またあらんや。（中略）彼の魚にはいむなる胡蝶の夢結ぶともなく、長き夜もひましろきに驚きからうしあくれど、いつのまにか降りけん庭も籬もわびたる家にはにげなき白かねの山とし高くつもりて、やせたるかたへの松ひとりあたたかげなり。猶よべの醉ごゞちにあたら雪。白馬の山にて見ん。いざとてはとり坂うち越ゑ、音羽の町に出ぬ。こゝなんいにし享保の頃、一位の君護國さうじやに清水の觀音うつし給へるころ、この里をくしたまひて、音羽の町といふなるよし。かの頃はかの君の御蔭にかくれ里のくゞつあまたものして、にゐよし原にもをさ〳〵おとらざりしとぞ。（中略）目白坂には、まだふみわけたる跡もなし。われどちが、みやびごころ、御神もめでたまはん、などいふ〳〵御前にいたるころもやみし雪またふり出て、袈裟かけて榎もしろきうちき着たらんやうなり。この御神や、出羽の湯殿山なる荒瀧のとおなじく、弘法大師の御作にて、威靈いちじるしとぞ。まづぬかづきてやすらふに、西風つようふきてさむさいふべくもなし。もたらせしさゝへの酒、あたゝむべき家も、まだおきぬ頃なれど、酒は冷酒よしと、丹溪とかいひしくすしの申侍り、何かはくるしとてくみかひて、すこしくいき出たるこゝ地に、御前のけしきはる〴〵見わたさる、和田外山の松も白う埋み、

むかひにたてる森も、名のみ赤城にていとおもしろう積りたり。こなたは礫川わたり、駿河臺も手にとるばかり見やらる。前の谷は刈田渺々としろくてすべてしろがねの世界に生れ出たるこゝちするに、鷺の田の畔よりひたつとび出たる、雲井遥かにとびきえてとつぶやかるゝに、また席のでと卷くるふゞきに、おもてむかふべくもなきに、麓のかたにおどろ〳〵しき音するは、水碓なるべし。そのもとに五六人の聲して、石尊大權現、荒澤不動明王と、さけび聲のいと悲しきは、垢離といふものとるなるべし。みなあか裸にてこほるばかりの川に打ひり、漲り落る瀧に頭うたせて、おなじ聲に叫びいふはいかなるねぎごとならん。あつごえたる衣きてだに、たえがたきこの雪空に、かれも人の子なり、いかなるねぎごとも御神うけたまはざらめやと見るめもそゞろさむし。歌なくばいかでと思ひしも、垢離とる聲の悲しきに興さめて、あたりの家のやう〳〵おき出たるがもとに、まだ殘りの酒酌んとうちいりて、まづ火桶のもとにかゞまれる手さしのべて、ありしこともしるすになん。

⁂

目白の雪見

あめつちのつもれる陰氣のあたゝかなれば雨となり、寒ければ雪となると。今年師走十よか朝げ過なる頃よりいたうふり出、しばしのほどに大路白〳〵となれるに、ちかければ、ましろの雪見んとて、ひとり新はせ寺へ詣でゝ、はしなる河内屋某といへるに入ぬれば、眺望いまなかりけり。まへなる田面はちりひぢもうづもれて、越の白妙も思ひ出ぬれど、行かふ人もろりにやのれる、かちきやはきけんと思はれ、しるしの棹もたてると聞けるなどひとりごつれば、あるじの出でゝ、むかふの木立はこゝら領したまふ陰涼山濟松寺とて、開山は水南和尚、開基は祖心禪尼とかや。寺領も三百

五十石、毎年卯月廿日の御忌日いとなむ御佛殿べとう芳心院とて二十石あて行はせ給うて、其外僧房も多く建て、妙心寺末寺なりし。右につらなりたるところは、毘沙門堂、高田戸塚の里にて、禪英山寶泉寺、上野の末寺にして、本尊は慈覺大師の作なると、其まへには文龜元年の頃、上杉治部少輔友良、靈夢によりて建てられける稻荷の祉あり。これをなん水稻荷とて名高し、此うしろにまた近き天明の初め富士へあまた度詣けるとて富士藤四郎といへる翁の、しん〳〵のあまり芙蓉の御山をあからさまにうつして、水無月望の日より三四日詣でのぼる事にはなれる。されどこの山の雪もぞけふはそえられぬらしなど興じけるに、しきりにふりつもりぬれど、水の流れのみすゝよかに見ゆるは、猪の頭の池よりはるかに流出で、そのかみ承應の年より上水にもかゝるなれ。人のわたるみゆるは、駒塚橋、水神のやしろは麓なる大洗堰のまもりとや。此あたり小家がちなる打つゞきて、小わらはのむれて雪まろげしするあれど、をとな〳〵なるは雪佛てふものつくれるをみるとて、女のたなぐひなどかづきちいさやかなるせれひてかゝつらふは、ふれ〳〵こゆきともいはん。垣や木のまたにともうたふなるを、かの上水のあまれるをうけて水車しかけ、としふるくこくもの精けする家なんありけるに、また近きころわたさね、油しぼる水車や出來てかしがましさそへけれどれどろ〳〵し。ここさへ枕神にもとれもふかし。雪もをやみぬれど、赤城の山あり〳〵と見ゆ。是れは、上毛野國赤城山三夜澤神は牛込氏なる人のこゝにうつして、この牛込の鎭守とすると、これにつゞける方は、家居も立ならびて白妙なれど、江戸川の流れのすゑ迄のぞまれけれど、こゝを東豐山といふならし。本尊は弘法大師の御作にて、荒澤不動とかや。うべも寛永の頃、御鷹狩の時立寄せ給ひて、南に目黒あれど、こゝに目白と呼ふべし

との給へるとぞ。このはとりには、北村季吟翁もすまはれて、蹤儀莊とかやいへるありけるよし。今は水戸大炊侯て御舘の内に、其井戸の殘れりとかや。されどつねにこゝにも遊び給ふらめど、この雪いかに見給ふらんといとむかしゆかしくなんおもひぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

九段坂の雪見

凡そ大江戸の四季をりふしの樂しみは、ことわざしげき世の中に、春は飛鳥山といふめる所に花見むとて、わせ道などさう〴〵しうをかしげなる女のわれも〳〵とまかりて、賑はしう行もをかし。夏は川邊に螢の飛かふを見また花火に遊ぶ人〳〵はいはんかたなし。秋は名だかくてらす光を武藏野にながめ、こゝかしこにて夜ふくるまで酒のみ物語してみな醉ぬる事ぞかし。今は花も紅葉もともにこそ散はて、冬枯れまさるむぐらの庭には木の葉はふりしきて、猶霜の下草をかこち、哀れを忍び、閨さむしろの折から嵐はげしくおどろしう吹そひて、夢おどろかすばかりにて、もらぬ時雨に袖のみぬらし、更行夜はにさのみ音たゑはてゝ、やり戸をなむ明て見渡すかたも白妙に降りつもり、またきぬ〴〵の空にいにけむと思ひしもむかし、田安臺といひていづちへも見はらしよき所なり。後この臺をいかなる人が九段坂とや名づけけん。空くもらぬ折からは幾千里のほかみわたさるゝに、名におひたる筑波根の和歌にもめで詠しられぬれど誰しらる人もなく聞つたへける御山なり。ならびて上下總の國と安房の國、かたへは渺々たる蒼海原の雪かあらぬか白浪のきら〳〵しう目もおよばぬたぐひにて、天が下にめでし名のかしこき不二の高根はいと白妙に見え、その外たつきもなき遠近のめで見むもいはんかたなくて、冬枯し梢などに咲花の春と思ひて夜もすがら降りつもりたるを、雪見せんとてゐにけるが、幾千町槙のいた家のむ

ねたちつゞき、また所せきすみかに梢まだらにありしもそれふしてめづる白妙も隈なき野はらともうたがはれて、かしこき御城のふもとなる堤にれひしげり、老たる松の立つゞき幾とせか色もかはらずうつるも深き堀の水つらゝの床のさゝ波にめぐりあそびしをし鴨をいとめでたしと思ひぬ。夫より牛が淵とかいへる所、昔はくのあしを牛車につみてこの坂をなんひきあげしがいかにしてや堀にれちいりけれど、ろれより名づけたりとなむ。またけしうはあらぬ人どもさう〳〵しう、友などひとり二人さふらひ給ひて、をかしげなるさまに歌などよみいにけり。いとかたはらいたく思ひぬ。又下ざまの人などは世のつねならぬ人ともあらねど心うつくしうあてはかなることなりけれど、いにしへの人雪をあつめて燈火としてくる朋と文などよみけりとやふるき書にも見れたり。いかでかさる心ちありけむといみじうなぐさまむを、我もかろうじて物いたくやみにしかも。

待乳山の雪

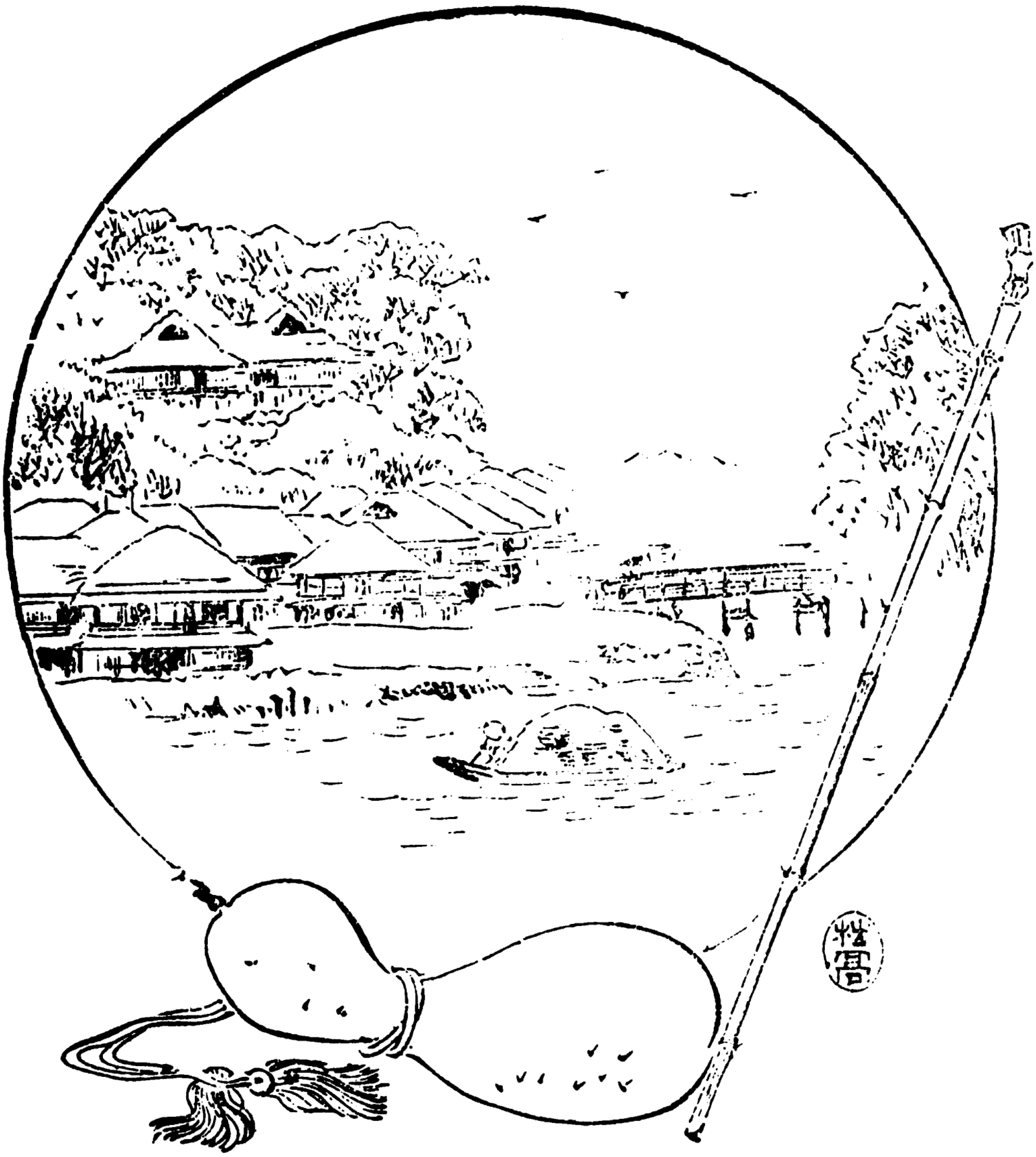
草の屋主人

春は錦となびく堤の花、秋は玉とくだくる、岸の月、向島わのけしきは、何時はあるにあらねど、雪のあしたは、げにぞ、ふりはへてゆき見まほしくればゆる所なる。袖寒くとも、氷るとも。

白ひげの森は、けふの名にやあらむ、眞白に染めつくせど、三圍の神の宮居の御めぐりの松の常葉の片葉も見せずふりうづみたる、自ら心もすみわたりてればゆるに、岸に堤に聳れたる高どのも、かつしかわたりの賤の藁屋も荒小田も、たゞ一面に銀つみ白玉眞玉しきつらねたるぞかりの雪げしき。にほひのみかは、心さへにある心地して面白く、去るしの柳の枝も、なびくかたなきまでに、力なげにやさしくふりうづもれし

梅若塚の邉り、ふみわけてたゝずめど、見しよの人にあらねど、なか〳〵に忍ぶるゝあとの多かる。雪によどめどや波靜なる隅田川、岸は白布を晒したる如く見れど、亂れかゝれる雪に、一入亂れたる蘆の枯葉の此處彼處、馴れてもさすがにさむからむ、氷とぞかりの河風に、翅たゝみて、二つつれ、三つ伴れ、うつくまりたる水鳥はさながら白布に摸様かけたるが如くならむ、此のまゝにつとにして、家なるいもに着せまほしき心地ぞする。

高くはあらねど、雪は面白き待つち山、鐘の音も白うひゞくとぞかりればゆれど、繁くはあらねど、雪は深き水神の森、ふき越す風もまた眞白にわたるとればえ、うちむかふもの事に、清くやさしく美しくあはれ



なる向島わの雪げしき。げに、春の花秋の月にもまさりけり、ものしづかなるからに。

冬の休暇

千稲

七尾港は能州の都府なり。人口繁多なりと云ふ能はざれども百貨湊る所、四通八達の便ありて然も風光絶美、海岸に立ちて遠く望めば恍惚として神飛び氣浮ぶ。彼の大伴の家持が『とぶさたて、舟木伐るといふ能登の島山、今日見れば、木立繁しも、幾代神びぞ』と詠み、又『香島より熊來を指して、漕ぐ舟の、かぢ執るまなく、京都し思ほゆ』と詠みし鹿島津は、即ち此邊りならんか。

町の北方に山あり。高からざれど樹木蓊鬱として繁り、枝を參差ふる老松杉、晝も暗くして空翠常に衣を濕せり。此山の中に禪寺あり。仰ぎ望めば門瓦僅に木葉の間に顯れて、朝に夕に勤行の木魚の音は、幽に俗を隔つる雲の内より洩れ來りぬ。

我此地に來りし時、暫く旅宿に宿りしかど、騷擾にして我等書を讀む者の居る所にあらず。依りて此禪寺の室を借りて此山中に移り、生徒十數名と共に起臥し、晝は校に出でゝ業を授け、夜は同じ燈火の下に書を繙く、室を共にし食を共にし、行住坐臥少しも相離れず、怠るを戒め進まざるを勵まし、相親む事父子の如く兄弟の如し。アゝ是等の子、親に離れ兄弟に離れ、近きは數里遠きは十數里、笈を負ひて此地に業を勉むる者、我も又遠き山河を越え故鄕の天を離れて此地に來る。其境遇共に相似て思ふ所も甚だ異ならざるべし。鄕にある彼等の慈親が寒暑につけて彼等の身を思ふ情、彼等が朝夕空を仰いで故鄕を慕ふ心、誰か異なりたる事あらん。思ひ來れば胸塞りてそゞろ涙の滾るゝを覺ゆ。若し夜更けて我獨り孤燈の下にある時、彼等が無邪氣

なる寢顏を眺めつゝ、其夢みる所の夢を想へば、何れが故鄕の夢にあらざらん。可憐なる彼等は常に云へり。我は寢ぬるを以て最樂みとなす、如何となれば我は夢に父母の膝下にありて其慈愛なる顏を仰ぐを得べければと。

去年の十二月の末、學期試驗も終り終業式も終れり。今は彼等が鄕へ歸るべき時は來りぬ。彼等は既に一ヶ月以前より指折り數へて授業の終るを待てり。夕飯を終りて火鉢の傍に相集る時は、必らず歸鄕の日の來るを數へて鄕里の樂しき遊の事に及ばざるはなし。愈々試業の近寄りしよりは暫し忘れて孜々として勉勵すれば、漸くに倦みたる頃は又此思の湧き出ると見え、時に書を置き忙然として鄕里の快樂を想ふ者多し。

終業式の終りし夕、彼等は欣々として滿面に微笑を湛へ、眞に喜に堪へざる者の如く、或は荷物を造る者あり。或は書籍を處置する者あり。或は机を片寄する者あり。或は町に出でゝ草鞋を求め來る者あり。明日は三時に起きんと云ひ四時に出發せんと云ひ。車よりせんと云ふ者あれば足弱しと嘲り。疾走して行かんと云ふ者あれば倒れて動く事能はざるべしと笑ひ。日一日に行着かんと云ひ、途にて一泊せざるべからずと爭ひ。一として歸鄕の準備鄕里の談話ならざるは無し。やがて寢に就きたる後も、容易に眠る事能はずと見ゑ、夜すがら臥處の內に動き續けて、未だ夜の明けざるに既に起き出で、昨夜は遂に睡まざりきと云ふ者多し。半年相見ず相逢はざる父母兄弟の聲に接し容貌を仰ぐ事を得る今日、彼等の眠る事能はざるも理なり、彼等の蓐を蹴て早起するも理なり、喜悅は彼等の身體を支配して靜ならしむる事能はざるなり。獨り彼等のみならず、誰かかゝる塲合に於て樂しからざらん喜しからざらん、況や父母兄弟門に倚て其來るを待つあるをや。我は彼等の言を聞て思はず同感の淚を揮ひ、彼等の手

を擬りて云へり。早く歸りて其健康なる容貌を示すべし、如何ばかり父母の喜び給はんと。

「さらば先生行つて參ります、隨分御機嫌宜しく」と皆々暇乞を述べて、喜び勇み雀躍して出發せり。我は入口に立ちて彼等を送れば、皆顧みて莞爾として我顏を仰ぎ「さらば」と一揖して走り去りぬ。此日は折惡しく北風烈凜にして六花霏々として降り頻れど、其の身體は喜悅の爲に温りて風も雪も物とせず、積る雪を左右に蹴開く足元勇ましく、恰も凱旋の兵士の如くに、些やかなる荷物を肩にして其後姿揚々たり。我は其影の消ゆる迄目送せり。

彼等が歸り去りし後は愈々寂寞を加へ、獨り机の前に端坐するも何となく物足らぬ心地して心靜ならず。強て書を讀まんとすれど、只同じ所のみを繰り返して意茫々、心何處にか迷ひて徒に煙艸のみを吹けり。詮方なきまゝ書を閉ぢて机に倚れば、忽ち彼等の事のみ腦中に浮び出で、今は何處の邊りをたどり行くらん、折も折とて此雪此風、如何に苦まん如何に惱むらん、過はあらざるか迷ひはせざるかと、我ながら怪しき迄無益なる事を思ひ出で、心緒麻の如く亂れて修めん術なく、立ちて窓を開けば、木枝を鳴らし來る北風は愈々烈しく、雪は虛空に舞ひ上りて朦々咫尺も辨ぜず、夫のみならず、折々雷の如き凄き響何處ともなく轟き來りて、積みたる雪は地も搖ぐばかりの音して落ち來り、凄愴たる風景見る目も恐ろしく、心益々穩ならで、アヽ諸子の身は如何になりけん、道も惡しからん雪も積りつらん、哀れや其少體は恙なく行き着くを得可きか、若し倒れもせば如何にせん、凍えもせば如何にせん、無情の天は何故にかくも彼等を惱ますらんと、同じ事のみ思ひ續けられ、窓に倚りて忙然として佇立めり。鐘は夕を送りて緩かに響き來る。

夜に入りて獨り燈火を點じ、再び書を開きたれど、尙

我傍に諸子のあるが如く、折々談話するが如き聲讀書するが如き聲耳に聞ゆ、先生と呼びて微笑する顔、寒し〱とて顰むる顔付など、我眼前に髣髴として顧みる事折々。既に此處を去りたりと知りて尙此處を去らざるが如く思はれ、既に此處に居らざるものと確信して尙傍にあるが如く覺ゆ、心彼此れと惑ひて我ながら呆るゝ事多し。アゝ飮食を共にし室を共にするのみの我にして別れたる時は此の如く思穩ならず心苦し。況して父母が其子を遠き數十里の外に手離する時の情如何、從て此度彼等慈愛なる父母が其愛子に接せし時の心の思ひやられて、涙ぼろ〱と落ち來りぬ。

かゝる思に日を過して、心愈々屈し氣益々撓めど、あな女々しや、かくては何時迄も果しなし、かく懊惱して此山中に籠らんよりは、我性として好む所の旅行を試み寒威膚を刺す風を犯し、積雪脛を沒する内を別けて我健脚を試みんか、然り、鬱々として日を送りて何の樂かある、歌枕求めん爲とは嗚呼がましけれど、せめては拙吟の三ッ四ッ得たきものと、遊意勃々として起りたれど、窓を開きて天をうかゞへど、あな無情、尺餘も積りたる雪は容易に消えざるのみか、空は尙朦として曇り、滿界凡て雪ならざるはなく、家も埋れ木も埋れ見渡す限り茫々たる白天地。只僅に七尾灣の潮水膏の如く漂ふを見るのみ。口には大言を吐けども元來暖國に生れて雪に馴れざる我、如何で一歩も足を踏み出す事を得可き、遊意頓に消えて勇氣忽ちひるみ、旅行の企は玆に畫餅となりて、他に詮方なきまゝ、獨り淋しく此山寺に冬を過す事となしつ。

結跏趺座永く煩惱を絶ち凡塵を去りて淸淨無垢なる身とならんと云ふにあらず、法の燈に無明の闇を照して眞如の月を仰がんとする身にもあらねど、雪の爲に旅行を妨られ寒さの爲に外出する事もせず、寂々た

る山寺の中に默々として靜に端坐すれど、元より俗事の鞅掌を知らず世事の繁忙を顧みざる身には、心漸く澄み來りて心神淸く、萬思漸く去りて胸に塵起たず、松籟の聲落雪の音又心氣の汚を洗ふ媒となりて、遠く世俗の羇絆を脱し、永く塵埃の巷を隔りたるが如し。

或日止むを得ざる要用ありて町に出れど、平常に似ず四邊騷しくして人々忙しげに走り廻り、此處彼處の店頭には赤毛布蒙りし田舍人夥しく集れり。何事ならんかとつらく思へど、アヽ我は忘れ居たり。今日ころは實に一年の暮の大晦日なりけれ。扨は人々の奔走するも理り、債鬼門を叩きて世には安からざる胸を撫づる者も多からん、元よりかゝる患は無き身なれども、かゝる日をも忘れ暮し、殆んど新年をも忘れ果てんとせり。山中暦日なしと人の言に云へど、眞に我は暦日を忘れて只茫として夢の如く暮しけり。いざさらむ速に端書を求めて年賀の文を認めんものと、蒼皇として歸り來り、机に向ひて筆を執れり。今に至る迄暫く世事を隔てし我室へも、茲に始て年の暮は見舞ひぬ。

鷄三度鳴いて新玉の年は來りぬ。降り頻りし雪は止みて空全く晴れ、朝日の光はうらゝかに照らして軒場に囀づる雀の聲も樂しげなり。我が未だ朝膳に向はざる前に、既に七尾町にある學生等は踵を接して來りぬ。依りて共に屠蘇の杯を上げて、聖壽の萬歳をことほぎ相互の健康を祝ひ、初めて我身も新らしき大御代の春を迎へたる心地せり。かくて十時に校に出で歸途二三の知人の許を廻りて歸り來れど、再び身は寂寞なる室中に默座して、紙鳶を登す子等の叫ぶ聲をも聞かず、羽根を打つ乙女等の戯るゝをも見ず、目出たしとて奔り廻り樂しとて蹌踉たる人々の聲をも聞かず、僅に松風の音解けて落つる笹の雪の音のみを耳にして、我は

復た世俗の騒擾喧々たるを忘れ、數日の間書を友とし筆を侶として、日西峰に入りて茜の光窓をさす頃始めて夕暮なるを知り、日東山を離れて雀の軒端に囀づるを見て始て朝なるを知るのみ。

あゝ我れ生れて年を迎ふる事二十三、未だ嘗てかゝる安靜なる新年を迎へし事あらず、實に記して以て後の語草となすべきか。夫につけ歸卿の諸子は如何なる新年を迎へけむ、彼等は父母兄弟と團欒して必らず樂滿ち喜溢るる新年を迎へしならむ。あゝ諸子よ、善き年を迎へ速に歸りて我に語れ、世に樂は多かるべけれど諸子と共に語る樂にしかず、默々として靜坐する間に、只忘れ難きは諸子の身と郷にいます我父母の事とのみ。

今は諸子が旅装を整へて歸り來るべき時となりぬ。我は指を折りて一日も早からん事を待てり。されは彼等が父母は一日も長く其膝下に彼等を置かん事を願ひ給はんものを。

野寺の墓

石榑千亦

（い）

赤坂田町に慾七とあだ名うけたる八百屋ありけり。山根七兵衛といふ氏も名も揃ひてあれど、年に二たびの營業税をさめにゆくほかは、人に呼ばれしことなく、わかき頃出し故郷の國の名をそのまゝに越後屋とつけたれど、そも呼ばれしことはきはめて少なく、たゞ慾七といふ名は、鬼の如き親には似ずてよき娘もたりといふによりて響きわたりぬ。

駒場の蘿蔔胡蘿蔔、澁谷の京菜水菜をはじめ、こゝかしこの畠よりいづる青物の、あつまりて市をなすによりて、こゝの町の名たひにけむと疑はるゝ青山の町はづれの問屋に、霜柱立山の丘の森影に月冴かへり、明

星の未だいでぬ頃より、人手に任せては心やすからずと老の坂路も打忘れて、白髪の頭に向鉢卷ひきしめ車ひきて買出しに來るはまづこの老翁とぞ定まりける。歸りきては、わが爪に火ともし頃まで華主の家々うりあるき、夜に入りては、薄ぐらき燈火の下に、なは異店々にも劣らず、老いてます〱盛に大きなる聲して、青物の大安賣々々々とつゞけざまにさけぶ。さばかりつとめ勵みければ、軒傾ぶきたる家、すゝけたる衣、其店のさま、其人々の装こそいと淋しけれ、金子はいたくあまれりとか。さても獸にひとしき物をくひ、なき後には誰に與へむとてか、たゞ一人の娘にも、絹物といへば半襟一つかけさせず、こゝの双子は爲めにならずと、わざ〱故郷より手織木綿とりよせて、子どもの時よりかへしては着せなほしては着せ、常にも晴にもこれ一枚。幾枚ありてもなほあきたらず思ふは女のならひ、まして花恥かしき生立、今年二八のさかりの年頃、いかでかはしからぬことあるべき、よしいふともかひなしとあきらめゐるにか、さても今の娘には辛抱ものよとあたりの人の口の端にかゝりぬ。これぞ妻のお初との中にうまれし雪とて、故郷の名物の其名をさながらに、雪の如くうるはしきやさ姿。親とともに朝まだきより夜更くるまで青物のせわして、泥をあびやれ葉をえらび土の中に成長たるに光はつゆばかりもかはることなく、紅粉など肌身はなさで、鏡の前去らず裝ふらむ人に見せまほしきさま。さては美といふものはおのづから其身に宿れるなるべし。

（ろ）

春すぎ秋たちて早くも雪子は二十のよはひむかへつれどいまだ夫をもむかへず、いかに美しければとて年月は露斗もまたず、やがて水もえたゝらむが如き彼面わにも老の波はよりぬべきをと惜みあひ、よし其職業はいやしくとも身分はよからずともわが家に輿入せさせ

むと、三太夫もていひこましむる華族の若殿もあれど、よそにやれずど入婿にならむといひこむもあれど、長からねどあまりに短く、短かゝらねどあまりに長く、いつも兩親の心に叶ひたるはなく、たまにはこれと思ひたるがありて、娘にきけど何事もれ二方の思召さむままにといふに、さてはと占はすれど相性方角につかへありとてろれさへ徒らになり、遂にふさはしきもなくて月頃經にけり。さるをりしもふとしたることより勝藏といふ一人もの丶、大工職にて手さゑ力もあり、年も似合はしきに、多摩川の水に磨きあげ、素振さへ氣心さへならびなく、日に一圓にてわが身だに休まずど、一年は一年一日もひまの日なき頭梁株。しかもこれが聟にならむとのいひこみ、こをとどしては又と二人かかる鳥もあらじと父が無上に喜べど、母もともにうれしがり、我家の長者にならむも目のあたりと、忙しさも打わすれ、其日はさすがの父も晝かぎり職業をやすみて節分の夜をゑらび、門毎に鬼は外と儺やらふ聲の中に、福は内へと招じつ丶、形どかりの式をあげて千代に八千代と壽げど、翌朝より塵にまみれし銀杏がへしもいつしかつや丶かに丸くむすびて、今の代には似合はしからずときらふ娘に、母がしひて染めさせたる齒の黒くなり、一世一度と力の限れでりて父が與へし赤き尺長かけて、夫の方よりれくりれこせし美しき衣きたるさま、又一きはと軒の前に市をなしたる人を見て、さすがに恥らひたる娘に向ひ、例の白髪頭ふりたてつ丶、やよれ雪とくこの蘿蔔あらふたりく。

(つゞく)

時雨(その二)

白魚女史

我夫の何とて此處にては、うちも、こらしも、なし給はで、藏の中などにはつれ行き給ひけむ、彼處にはむ

かし佩きたまひたる太刀劒など藏めたり。されど、いとしの子を、まさか御手には。いな〳〵いつまでも文子の迷ふならで、古へみがき給ひたる武士のたましひ、たゞには置き給ふまじ、義理に恩愛をたちもかね給ふまじと、母親は心も心ならず、呼びつ、さけびつ身をもだゆる折しも、得意顔なる父の後に、文子もうちしをれて從ふを見るより、やうやくに魂魄も身にかへりて、やゝ涙をぞふりはらひつゝ、まづ〳〵けがなうてうれしや、いで次郎たちよ早う學校へ行きね、母があまりにあはて過ぎて、御身たちをまでさわがせしよ、いざ吉野、之よりは仕事もいそがしきに、心して早う歸りて、何にても手傳うてくれよ、いざ〳〵と二人をぞせき立てつゝ、さるにてもうれしや文子、迷ひもはれてか、母もそれにて胸のうき雲もさりしぞや、わたら事にて父上の御出勤がけを、おさわがせ參らせしよ、早う御わび申て。あな何をいつまでもなく事のある、千太郎主のかなしくなきにはあらねど、大切の一生をあやまりなどするは、さかしき御身の心とも覺えず、情ある人に情もて報ゆるが眞の情、のう文子御後とも必ず、さやうなる當世はづれの事などはゆめな起しそ、あな何をいつまでなきてぞ、よろこぶべき事を不吉な、何ぞ、母が何處までも千太郎主をおろかと思ふがかなしきと。まださやうの事を云ひ居るか、彼の人が愚でなうて、誰が愚なる、折角にしづまり玉ひたる父君の御心を、またさわがし參らするにか、不孝の者やと、涙ながらに、きつとにらむる母親の心は、子故の闇にやまよふらむ。嗚呼何事も過世ぞ、こや妻己れはもはや、庭の敎も、ふみたがひたる子をもとがめじ、身をやつすまでに、巳れと己れをせきにせき、忍びに忍びてなほあふれ、にあふれ、わきにわき出し戀との事、今更に吾が如何でかりせき、汝が如何でかりにふさぎたりとて、せんなき事ぞ。たゞ何事も思ふまゝにまか

せて、玉の緒ばかりを、ひきとゞめんが親の慈悲、それにまだ今迄、つゆ知らざりしが、千太郎も繪には心ありとの事、彼の道には、彼の如きのものが、反りてよきやも知れず。何事も文子にまかしね。いとう時刻のうつりたる事や、早う羽織袴とりそろへねとの主人の言葉に、さては和殿は、文子を千太郎にゆるし玉ひしにや。日來にも似たまはぬ甲斐なき御心や。さても〳〵如何なるこはきものゝけぞ、かばかりさかしき親子を、かうまでに狂はすとは。こや文子、其方は日來の文子か、此母が生みて育てたる文子か、父上はゆるし給ふとも、母はゆるさじ。今一度思ひ返してよ、文子、此母を忘れずば、のう文子よもや忘れはすまじのう〳〵とて、涙にくれけるに、文子は身も世もあらぬ思ひ、母樣ゆるし遊ばしてよ、母樣よ、必ず〳〵行末御心をいため參らするやうの事は必ず〳〵致さじ、どうぞ〳〵之ばかりは、ゆるし給ひてよ、千太郎主もたとへ名ある繪師などにはともかくも、繪もて此世に立ち給はんやうの人とはならんと思へど。死ぬほどまでに思ひつめし我心を、あはれと思はして、どうぞ〳〵御ゆるし遊ばし給へ、のう母樣、いとうも御心をいためまつるが、誠にかなしけれど、千太郎主の事をもまた忘れられず。嗚呼など我戀は、せけどせくほどに、なほたぎちまさるらん、母樣さやうになげき給はで、我が末行を見そなはしてよ、不孝の此身にはとまれ、のう母樣吉野次郎をばあはれとおぼしたまはぬか、野次郎にめんじて御心をなだめ給ひて、不孝の願ひを叶へ給ひてよと、なきしづみたる母にすがりて、なげききこゆるに。文子さては、いづくまでもか、嗚呼如何なるしうねきものゝけにや、さるにても日來さかしき子、やさしきものとのみ思ひたる其方が、そのやうに、魔心のつきたるを見ても、吉野次郎等のまだがんぜなき行末が何たのまれん。かゝる不孝の子を見るも。





誰をかうらみん、皆此身の敎のおろそかなりし過ち、さかしと思ひたるが仇なりしのみ、白銀にも黄金にもかへがたき子を、そのやうに育てゝ、此世にながらへて、何の面目、何のたのしみのあらんとてたえ入るに、文子は今はえたへず、母樣と云ひつゝ、ひしとばかりに抱きつきて、巳れもふししづみぬ。

こや文、其方がたつての賴みに、此父も一度はいつはりしが、かくすは淺はかぞ、吾ははや時刻もおくるれば、後にてよく母に告げよとて出で行く父を、文子は前後もわかず送り出てゝ、あやもなくかなしむ母親に向ひて、のう母樣、數ならぬ身を深く思ぼし給ふ御心を、兼ねてより汲みに汲み參らせし故、去ばしは淺く御心を、いためまつらんと思ひて、なまじひにいつはりしおろかさ、ゆるし給ひてよ、母樣實は、妾は、千太郎主とは、とくよりの結髪と、云ふより母は、きつと起き上りて、文子何を云ふ、汝は夢でも見て居るにや、父上も、母も、さる約束をせし覺えはゆめあらぬを、父母が結ばで誰が結ふべき、祖父樣どうしにて、互みに結び給ひしと、なほ以て心得ね、此母が此家にとつぎこし折りは、先きの祖父樣は此世にはあらず、御身はそれより三年もたちて生ひ出でしに、何とて祖父樣どうしが、結び給ふべき、思ひても知らるゝにと。告げてだに誠になし給はぬ程に、今迄つゝみて、一人のみ思ぼしたる祖父樣の御心のくるしさは、如何ばかりなりけんと思へば、また一人に、わき出る涙を文子はおしぬぐひて、さやうに思召すは、げに道理になん、思へば誠に深きえにし、先きの祖父樣がみまからるゝ折り、我が祖父樣のおとづれられし影を、見そなはして、常よりは深くよろこばれ、今まで互みに水魚の如く結びたる此友垣を、我世のみに絶たんはいとをし、貴殿方にも、やがては嫁を迎へられてならんが、御孫を見そなはさんは必定、もし女子の見え給はゞ、

今年生の我孫の若竹と、千代を結ばせ給はゞ、黄泉の下の心もうれしうなんどの給ひしを、祖父樣も二つなく結び給ひたる友とて、そのまゝにちかひかはし給ひしとぞ。やがて母樣も此家にとつがれ、三歲をへて妾がやどりしは、過世ありて、もとめて生ひ出しにて、何のうきふしなどの、妾にはあるべき。さるにいわけなき心に、云ふがひなく、折角に御兩親して、老樂に過ぐさせ參らせし祖父樣の御心を、妾が過世ばかりにて淺ましくも人にもかたらで、ひとり御心をいためられし十八年此方といひさしてむせび入りしが、なほも言葉をつぎて、先ほど父君が藏へつれ行き給ひて、文子汝がさやうなる不義を申たつるは、必ず何か樣子のありてならん、子を見る事親にしかずと云ふが、此父は汝にかぎりてはと思ふがと、數ならぬ身をも生みの子と思召しての御言の葉のありがたさに、その由を、申聞えしに、さやうの事ならば、とくより云へばよきに、母上にもそのやうに告げよと、仰せられしかど、妾が淺はかなる心に、千太郎主の身の立つまでは、自らが不義のやうに遊ばしてとて、たつて御願ひ申ていつはりたるおろかさ、ゆるし給ひてよ。されど書に心ある事は、いつはりには侍らじ、母樣もとより妾が好む道、母樣の御心には、すゝまぬかは知り侍らねど、深きゑにしと思ひ汲み給ひてよ、さるにてもゑにしの事などを自ら云ふはづかはしやとて、袖を顏におしあてゝ、涙をばよろにまぎらすもあはれなり。あはれ愚痴なりしよ文子、さばかりのやさしき汝が心とは知らず、たゞものゝけの成す事とのみ、思ひひがみたるおろかさ。文子もはや愚痴はいはじ、千太郎の爲に心のあると云ふも、汝が好む道を一入にはげまんとの事にはあらざるか、かくさでよとて、あとは言葉もなく、默然として見やる空に、時雨は晴れ亘りても、此處は、げに、うき雲のみふたがりたり。

文林

山家梅　徳大寺實則

咲ぬまはとふ人もなきやまざとの
うめころ宿のあるじなりけれ

禁庭梅　東久世通禧

つかさ人つかふる袖もかをるなり
みかきの梅のはなのさかりは

窓前鶯　鍋島直大

朝れきて庭ながめんとまどの戸を
ひらくとともにうぐひすの鳴く

梅薫枕　高崎正風

木の本にまくらするかと思ふまで
はるの夜ふかくかをる梅かな

名所梅　長谷信篤

船よする棹のしづくのかをるまで
梅津のさとのうめさきにけり

嶺殘雪　押小路公亮

うすがすみたてるたかねに消殘る
雪さへはなのれもかげにして

竹林鶯　前田利鬯

色かへぬたけのはやしに宿しめて
千代もかたらへ園のうぐひす

翫梅花　本多忠貫

年ごとにはちの植木のうめみれど
はやいく年のはるや經にけむ

河岸梅　池田政禮

夕月夜ほのめきわたるさとかはの
ながれも清くにほふうめかな

新年鶯　諏訪忠元

年明けてまだひとゝはぬあさ庭に
はやくも來鳴うぐひすのこゑ　仝

若菜　仝

年ごとのよはひのかずに摘ものは
野澤にれふるわか菜なりけり

社頭祝　宮地嚴夫

天津かみ國津やしろにみいくさの
かちどきつげて祝ふ御代かな

早春雪　飯田武郷

あたらしき年のけしきをしろ妙に
つくりなしたるにはの雪かな

大葉子　仝

から國の風になびかぬこゝろとて
やまとの空にひれはふりけん

春のはじめの歌　三浦千春

賑はへる民のかまどのけぶりより
よもに霞みてはるは來にけり　仝

常盤橋かすみわたりてみついちの
まつにふきたつはるのまつ風　仝

寒梅　林甕臣

忘れては拂ひ開けつゝ窓のうめの
花ゆゑにわれは風ひきにけり

行路鶯　仝

霜どけに行きわづらひて垣根みち
戻るうしろにうぐひすのなく

春漸近　師岡正胤

山一重ひがしにはるや來にけらし
かすみほのめく嶺のまつむら

野鶯　仝

木傳ひし梅はつとにと手折りしも
野邊にのこしゝうぐひすの聲

名所鶴　三輪義方

淡路しまさやにはれたる朝なぎに
たづがねすめりすみよしの濱

佐藤嗣信忠信の妻　佐々豊水

かはらのやかはらぬ姿よろづ代の
女鑑とぞみるべかりける

白河楽翁公の傳を讀て　菊池眞澄

白河のきよきながれを世をわたる
人みなにしもくませてしがな

寄山祝　仝

龜の上の山とこそみれつるかめの
あそぶ御庭のやまのけしきを

早春柳　永石德文

さほひめは春のにしきをあを柳の
みどりの糸にそめはじむらん

岡鶯　松平健子

わが岡のたけのはやしに聞ゆなり
一ふしたかきうぐひすのこゑ

雪中鶯聲　鍋島榮子

白雪のふれるを見れどさむけれど
はるとはしるきうぐひすの聲

早春海　前田朗子

春霞たな引そめしうなばらは
浪のたちゐものどけかりけり

森鶯　蜂須賀隨子

時わかぬ常盤のもりもうぐひすの
こゑばかりこそ春めきにけれ

水邊梅　柳原愛子

さと川のこほりながれてゆく水に
かげこそみゆれ梅のはつはな

初鶯　仝

庵ちかくはつうぐひすの聲すなり

たにゝも冬はのこらざるらん

新年鶴　　関　祥子

あらたまのとしの朝日に大にはの
御池のかめもせをやはすらん

雨中鶯　　小池道子

ふる雨に花はかすみてうぐひすの
こゑのみ匂ふはるの野べかな

春鶯呼客　　仝

うぐひすの聲きかんとか朝がすみ
まだ小ぐらきに君がきませる

寒夜衾　　北島以登子

わつぶすまかさねても猶寒きよを
まづしき人はわかしわぶらむ

谷鶯　　仝

谷ふかみまだ消やらぬゆきの中に
めづらしくなくうぐひすの聲

鶯呼客　　小笠原艶子

うぐひすの聲の盛りになりしより
とふ人れはしやまかげのいほ

稲村崎　　原田蒼生子

劒いれしろのいにしへも思はねて
波たちさわぐいなむらがさき

箱根　　服部磯子

相模の海あまの小舟のほのかにも
みゆる高根やはてねなるらむ

早春雪　　鶴久子

かすむかと思ひし空のかきくもり
はるともいはず雪はふりきぬ

雪中鶯　　仝

うちとけて鳴うぐひすにふる雪も
春のものなることちこそすれ

山家梅　　中嶋歌子

めづらしきみやこの人の見ゆる哉　わがすむ山のうめさきしより

岡若菜　仝

きのふけふ遊ぶ子供の見ゆるかな　岡べのわかなおひやしぬらむ

早春鶯　宮地琴與子

うぐひすの聲より外にはるぞなき　また山さとはゆきふかくして

庭松　安東菊子

千年をも我よりとしめて冬がれも　しらずがほなるにはの松が枝

松の雪　仝

おしなべて雪は積れどことさらに　松の木ぶりのおもしろきかな

早春鶯　内田ゆか子

一とせのうれしき物のはじめかな　春立つけふのうぐひすのこゑ

山立春　海上壽子

打わたす遠のやまべにふりつみし　雪をかすめてはるはたちけり

野若菜　師岡すが子

打なびく春のかすみのはる〲と　みどりになりぬ野べのわか草

立春　林甕臣

空みれど、烏カア〲、庭みれど、雀チウ〲、日づもりの、垣根の雪も、今朝みれど、解けそめにけり、春來れど、きゝの樂しも年立てど、きゝの懐しな常に聞く、烏のこゑ、雀のこゑも、
カアと鳴きチウと鳴く音も春くれど
耳にとまりぬ鳴けや鶯

雜録

●皇太后陛下の御誕辰　去二十三日は皇太后陛下の御誕辰なりしかば親王、諸王、親任官、宮内省高等官等は青山御所へ參賀し奉りしに酒饌を御下賜あらせられたり。

●皇太子殿下の御仁愛　皇太子殿下には、相州葉山の御用邸御發輦の際、葉山村へ金廿五圓、知事、書記官、警部長、參事官等へ反物、其他神奈川縣屬官、警部、巡査、村長等へも、若干の御下賜あらせられしと承る、尙ほ仄かに承るに、葉山村字一色には、八十歳以上の高齢者、十三人あることを聞召され、恐れ多くも、高齢者へは、各金三百疋づゝ御下賜遊されしに、孰れも殿下の御仁愛に感泣したりと云ふ。

●兩皇女殿下　常宮周宮兩　皇女殿下には、御避寒の爲め相州小田原の海邊に御出遊あらせられ、鈴木善左衛門所有の鷗盟館悉皆御用仰付けられ、當分御滯在あらせらるゝとぞ承はる。

●豫撰歌

寄山祝

參謀總長陸軍大將大勳位功二級彰仁親王

あつさゆみやしまの外のしま山も
よりてつかふる君が御代かな

海軍大佐大勳位功四級威仁親王

君が代と共につもらむふじのねの
雪はきゆる世あらじとぞ思ふ

勳一等慰　子

はるかなるとつくに人もあふくらむ
大内山のたかきみいつを

宮内大臣從二位勳一等伯爵臣源朝臣久元上

はるもさの山もみどりのいろそへて
いやさかえゆくきみが御代かな

侍從長兼内大臣正二位勳一等侯爵臣藤原朝臣實則上

ことしよりこゝろあらためてたかさこの
山まつかせも千代よはふらし

樞密顧問官從二位勳一等伯爵源朝臣高行上

大御代のひろきめくみにあしひきの
　山また山もうちひらけつゝ

題者點者　御歌所長樞密顧問官從三位勳二等男爵臣藤原朝臣正風上

あたらしきみつきつみろへれはくらの
　山ゆたかにもみゆるとしかな

講頌　從一位勳二等藤原朝臣實德上

山といふ山はあれどもよろつよも
　うこかぬやまはふじのしはやま

皇后宮大夫正三位勳一等子爵臣源朝臣敬三上

あをくものむかふす山のはてまでも
　君がめぐみのかゝる御代かな

讀師　從二位伯爵臣藤原朝臣基祥上

あしひきのやまといふ山にひゝくなり
　よろづ代うたふくに民のこゑ

講頌　從三位伯爵臣源朝臣重朝上

あきらけくをさまる御代のしるしとて
　山のれくにはすむ人もなし

奉行發聲　御歌所參候侍從從三位勳五等子爵臣源朝臣有良上

大君のみいづによりてめづらしき
　山みる世ころうれしかりけれ

奉行　御歌所參候京典從三位子爵臣菅原朝臣利恒上

うごきなきかめのを山は大君の
　御代のためしにたれもひくらむ

講師　從三位子爵臣藤原朝臣功長上

あしびきの山のれくにもすむ人の
　にぎはふ御代になりにけるかな

講頌　御歌所參候京典從三位子爵臣藤原朝臣光昭上

あらたまのとしのをながくあふかまし
　大内山のよろづよのかげ

講頌　御歌所參候從四位子爵臣源朝臣忠敬上

君が代はかみちの山のさかきはの
　さかえゆくらむ万世までに

預撰　權掌侍從六位藤原道子上

ちはやふるかみのみ國の位山
　いよいよたかくなれる御代かな

神奈川縣津久井郡長正八位宇高正耶上

きみがよのちとせをいはふことのはの
　ちりもつもりて山となるらむ

御歌所勤務宮内屬臣岑朝臣綱二上

はるかなる南の山のよろづ代も

わが大君のみてに入りにき

從五位井上義行女わかな上

日の本の上に立つべきくにぞなき
ふしよりたかき山はあれども

愛知縣士族三浦於住上

うごきなきわが大君のたかみくら
よろへまつらむ山はなかりけり

山口縣士族伊藤雅男上

天皇のたかきみいつにくらふべき
山ころなけれ山はあれども

●物部神社　石見國、安濃郡、川合村、國幣小社、物部神社は、可美眞手命の本宮にして、星霜千有餘年、神德いと高く、我國の武神として世に崇めまつれり。明治二十七年三月の大典には、陸軍將校諸氏相謀りて、古典を考究し命の神像を寫して、壯嚴なる銅像を鑄造して之を献納して聊か奉祭の意を表せしが、超ゑて同年五月六日の暴風雨に逢ひて、廟宇全く破壞したりしかど、同社宮司、從七位物部連金子比良麿氏は、こたび可美眞手命十七世物部竹子連四十七代の嗣たる、從四位男爵金子有卿と相謀り、同社保存の方法を講じ居れりとぞ。

●豐公誕辰祭　豐太閤は、天文五年、丙申正月元旦を以て誕生ありしことは、人の知る處なるが、今二十九年は丙申にして、公の誕生ありしより、恰も三百六十年にあたれるを以て、來る二月十四日、即ち舊暦の正月元日を以て、京都大佛豐國神社にては、誕辰正當祭を行ひ、献茶式、其他餘興を奉納せんとすといふ。

●袈裟御前の塚　京都洛南、上鳥羽村に在る戀塚と云ふは、烈女の譽高きかの渡邊渡の妻にて、遠藤武者盛遠(文覺上人)の刄に罹りて、一命をおとしたる袈裟御前の墓なり。數百年の星霜を經し事とて強たく頽廢したれど昨年は同女の七百五十年忌に相當せしを幸ひ、村内の有志者等、塚を修し、碑を建て、節女の名を、益々世人に知らしめんとて、寄附金を募り、或は

懐舊の詩歌俳句をも募集せんとしたりしが、種々事故ありて、今日まで建碑の運びに至らず、本年は是非とも花季までに竣工せしむる筈にて、寄附金及び詩歌の募集も、更に本年三月三十日まで延期したりと。

●學生の齒力　さきに川上文部參事官が、學事視察として、新潟高等小學校に至り、生徒の活力表を閲し、更に齒牙を檢査すべき事を勸告されしに依り、同市の齒科醫中村雄三郎氏が檢査したる成蹟を聞くに、全生徒四百九十八人中、完全なるは僅かに九十四人にして、不完全齒數中、齲齒の數(乳齒に齲齒あるも齲齒中に加へず、乳齒中に算入す。)千三百九十四枚、内第一期則ち僅に琺瑯質を腐蝕せしもの八百八十三枚、第二期則ち、象牙質を腐蝕するに至るもの二百四十六枚、計千百二十九枚は本人未だ苦痛を感せず、父母も其兒の齲齒あるを知らざるものなり。第二期即ち腐蝕の神經に達し、自ら齲齒あるを覺るもの二百六十五枚あり、誤て衝突或は磨擦せしより折傷磨耗せしもの九枚、成齒發成期に於て、乳齒の拔去を怠り、傾斜俯仰上下緊合せずして、咀嚼の用を全うせざる不正齒二百六十四枚乳齒尚は存在して拔去りを要するもの二百十三枚、合計不完全齒數二千八百八十枚あり、其多數なる驚くべし、斯の如く齲齒の多きは、畢竟掃除を怠り、不潔より起る者にして、爾後掃除を勉め、一期二期のものは、今に於て金屬を以て塡充せば、之を豫防し得べく、三期のものと雖も、時期經過不治に至らざるものは、金屬又はゴムを以て塡充して、苦痛を免るべし、不正齒は初め成齒發生期に於て、豫め乳齒を拔去せば、之を豫防し得るものとす。又齒の注意法は、

齒の替る節は、齒科醫の指揮に從ひ、順序によりて乳齒を拔き去るべし。然らざれば齒並不正となり、咀嚼の用をなさず。且面貌を醜くゝす。

齲齒は一期二期は自ら苦痛を覺えざるを以て、三期に

至りて初て治療すれども、一期二期中に塡充すれど、苦痛もなく費用も少なく、完全となるを得。

朝夕歯の表面及び咀嚼面を歯別に歯磨粉を付て丁寧に磨き清潔ならしむべし。但し悪き歯磨粉、又は堅く結晶せる鹽は、琺瑯質を傷ふ懼れあり。

食事後、又は甘き者を食したる後は、曹達水又は鹽水又は微温湯にて嗽ひし、手拭にて拭ふべし。尤も小揚子にて、歯間にある滓は、丁寧に去るを要す。

極熱極冷のものを、急に飲食する時は、琺瑯質を傷ふ懼れあり。又青梅の如き、極て酸き者は歯を弱む。

歯石の付たるは掃除すべし。殊に緑色歯石は一種の黴菌質にて、歯を軟化するものなれど、歯科醫に就て掃除を請ふべし。

偏側にて嚙む習慣を附くべからず。

歯の強さを誇り、漫りに堅きものを嚙砕く可らず。

睡眠中歯ギシリをなす習慣あるものは手拭の一端を喰て寐るべし。

●學齢兒童の歯及口腔の攝生　「ドクトル」リッチルといふ人は學齢兒童の歯及口腔の攝生の事に就て、現今よりも尙は一層重大視する必要ありとして、左の事項を伯林内科醫學協會に提出せりと云ふ。

(一)　町村立學校に出席する總ての兒童に對し、一定期間毎に其歯を檢査するを要す。之が爲めに各學校は、其學校醫として老練の歯科醫を任命する事。

各兒童の歯の檢査は、少くも毎年四回擧行する事。

各兒童の歯を治療するが爲に必要なる治療所は、市町村の公費を以て建設し、且つ之を保持すべき事。各兒童の父兄に向て、毎回の檢査成績を通告し、且つ注意を與ふる事。

必要と認められたる治療を私に試み、又は適當の報酬を支拂ひて、學校歯科醫に之を依賴するは、兒童父兄の隨意たるべき事。

(二)　貧民の兒童の歯を治療せしむる爲め、救貧歯科醫を任命し、場合によりては其各家を巡回して檢査診斷せしむる事。

（三）咀嚼裝置を保護することの緊要なる所以、及口腔の衛生法等に就て、時々市町村立學校内に於て講話を行ふ事。

（四）歯及口腔の衛生法に就て緊要なる事項を、極めて平易に記述し、之を印刷に附して、總ての貧民間に頒布する事

●東京盲啞學校生徒失官の原因　なりといふをきくに、

今失官原因を調査するに、盲生失官の最多きは、遺傳黴毒所謂胎毒にして、三十七名中九名、啞生失官の最多きは、生來にして六十六名中二十八名、全數三分一を超ゆ、次は急性腦膜炎、所謂驚風にして六十六名中九名あり、失官年齢を檢するに、盲生は一年二年三年各五名あり。乃至二十歳に一名あれども啞生は生來を除きては二年に最多く、六十六名中、十一名の多きあり。之に次ぐは一年三年にして、各九名あり、而して八年に止まれり。兩生の差違此の如く、而して兩生共に一年より三年の間に多し。幼兒保育の責に任ずる者、深く注意せざる可らず。又啞生生來二十八名中九名は、從兄弟結婚者の擧ぐる所、一名は叔姪の產、一名は再從兄弟の產、三名は遠緣の產なり。

生理學者、近緣の結婚を戒むるは、聾啞盲癲白痴の類多くは近緣結婚者の產に在るを以てなり。一顧の價無しと云ふ可らず。今最慘狀を呈したるもの二三を擧げて、世人の參考に供せんとす。世人結婚に際し、肺結核、癲狂、白痴、盲聾等遺傳の有無を糺すこと切なり。而して本校啞生六十六名中一名は祖父、一名は祖父の弟に、一名は父の祖父に聾者あるのみ。直接の遺傳は、六十六名中僅かに三名にして、從兄弟再從兄弟等の產十四名あり。

本邦僻在の地に於ては、從兄弟の結婚を以て好偶とし、相慶する風あり。豈訝れるの甚しきものに非

ずや。

又茲に一の注意すべきあり。前記の如く、唖生は生來多く、盲生には僅に一人に止まると、同時に、唖生は中等以上の資産家子弟に多くして、盲生は概して中等以下に多し。是れ本校在學生に就きてのみの立言なれど、正鵠を得たるものと云ふ可らずと雖、唖生に生來者多くして、生來者中近緣結婚者子弟多しとするときは結婚の關係必ず少小ならず。思ふに中等以上の資産家、配偶を撰ぶには、必ず家格資産等、略均等なるを求めざる可らず、然るに均等者多からざるは、數に於て見易き事とす。是に於て止むを得ず、相知れる近緣者と結婚するに至るは、其主なる原因にして、媒酌を煩はさず家格を保ち、血統を重んずる國風、亦其の副因たるに非るか。然れども獨り家格血統の重んずべきを知りて、却て子孫の强壯を圖らざるは國家の爲に深く憂ざる可らず。

盲生の中等以下資産家子弟に多きは、生計の不如意より保育の方法宜を得ず。採光保温の方、衛生に適はず。營養の素を缺く等、必ず其主因ならん。殊に海邊及北國には著しく多し。是れ海邊は砂熱の反射、若くは砂粒の飛入等によるもの多かるべしと雖亦漁獵者の子弟、捕獲殺傷不潔の手指を以て眼目を摩擦する如きも、其一因たるものに非るか。北國雪地に於ては、冬季採光保温宜きを得ざる矮屋に蟄居し爐を圍み薪を燻し。又は炬燵を擁し、忽ち門外皓々たる白雪の反射を受け、或は之に反し、白雪の反射を辭して、忽ち陰暗の矮屋に入る等、皆衛生に適せざるも、因襲の久しき遂に風を成し、容易に改むる能はざるに因るか、是れ全く臆測に過ぎずして、衛生家の討究を煩はし、海邊雪地に居住する者に注意を促さんことを切望す。

●全國中の産婆　明治廿七年の末に調査したるもの

にによれば、内務省の免許をうけたるもの、一千九百八十五人、地方廳の免許を得しもの、三萬一千九百三十六人、すべて、三萬三千九百二十一人なり。

●喫烟の害　米國なるブルックリン市にて、一青年喫煙の過量なりし爲めに狂氣せりといふ戒む可きは、學年兒童の喫煙なり。

●滊車の速力　昨年英國にて、二鐵道會社の間に競爭ありて、其の結果、一滊車はロンドンよりアベルヂーンまで五百四十哩の距離を、五百十二分の間に駛走したりといふ。又米國ニウ、ヨーク中央鐵道は、ニウヨークより、ブファロウまで、四百三十六哩半の距離を、四百〇七分間に駛走したりといふ。されど英國の滊車は、一時間の速力六十三哩半にして、米國のは六十四哩三分の一なり。今地球の周圍は赤道に於て、二萬四千九百十一哩なるを以て、ニウ、ヨーク中央鐵道の速力を以て、之を駛走する時は、十六日二時五十八分を以て週了し得らるべし。

●中佐墓畔紅涙多し　田庄臺の激戰に、花々しき手柄を後の世の語り草に殘して、大和櫻の一枚、をしくも遼東の野風に散りはてたる陸軍中佐、今田唯一氏は山口縣、美禰郡、綾木村の出身にして、形見の墳墓は同村を距る十七八町の處に在り。武夫の妻のかねて覺悟の上なからも、今更に戀しく懷しきは人の情なり。聞く未亡人瀧子は毎夜雨風を犯して、夫の墓に詣で、神燈を獻じ、神酒鮮魚を供へ、家に在りても中佐の神靈及寫眞に對ひて、死に事ふること生るときの如く、人々其心に感せぬはなしとかや。又中佐の墓前には、昨年同村出身安田陸軍中佐の持歸りて、寄贈せられたる「超」の字を大書せる四間四方の分捕旗を樹て置けりとぞ。暮雨西風感如何ならん。

●婦人慈善會　故北白川宮殿下の王妃を會長に戴だける、大坂將校婦人慈善會は、本年の初會を去十五日

午後一時より偕行社樓上に開き、新井衛戍監獄長、先づ補助員の資格にて會務を報告し、次に吉谷、赤松兩師の慈善談あり、了りて山澤師團長の夫人操子より茶菓を饗し、四時頃散會したり。當日は百三十餘名の會員大抵白襟紋附の服裝にて參集したりといふ。

●貞婦　岐阜縣にては本月四日、金圓を賞賜せりといふ。

各務郡鵜沼村故坂井半重郎妻　たま

資性順良夫に事へて貞節夫の中風症に罹り身體自由ならざるに當り承歡扶侍日夜怠らず家計益々貧困に迫るも毫も屈撓せず看護の傍ら微業を營み以て醫藥の資に供す其操行十三年一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金二圓下賜す

●外國語の轉訛　こは峯是三郎氏のものせられたるものなりといふ。參考の料にとてのせつ。

今は本邦の普通語にして、素と外國文字言語より轉訛せしものあるは、明白の事實なるが、隨時見聞する所によりて、輯錄せしもの一百有餘言を得たり。

衣服の部

（一）洋服の胴着をチヨツキと稱するの、英語 Jacket より轉訛せしなり

（二）毛布をケツトウと稱するは、英語の Blanket の前半を省きて後半のみを略稱するなり

（三）織物にシチンの名あるは、即ち繻珍の唐音にして葡萄牙語の Setim、佛蘭西語にては Satin、蘭語は Satign なりと云ふ

（四）雨衣に合羽即ちカツパの稱あるは、西班牙語の Capa に由來す

（五）羅紗織物の粗なるものをヘルと云ふは、英語の Mohair（小亞細亞地方の山羊の毛類にて織りし物）の前半を省きて後半のみを略訛せしなり

（六）織物に天鵞絨即ちビロウドの名あるは、西班牙語の Vellda より轉訛せしなり

（七）窄袖の繻袢をシヤツと云ふは、英語の Shirts に基つく

（八）織物に呉呂服即ちゴロフクの名あるは、蘭語の Gorfgrein の後半を省きて前半のみを略稱する

なり

(九) 藍色の染料にベレンスの名あるは、英語の Berl in blue の略訛なり

(一〇) 亞麻の織物をリンネルと云ふは、英語Linnenの轉訛なり

(一一) 舶來の織物に金巾即ちカナキンノ名あるは、葡萄語のCanequin の轉訛なり

(一二) 織物に羅紗即ちラシヤの名あるは、蘭語のLaken Rassen の略訛なり

(一三) 段通即ちダンツウと稱するものは、毯子なる文字の唐音に因るなり

(一四) 服地に唐棧(トウザン)の名あるは、元と印度のサントメ(San Thomas)より來りしものを、サントメ縞と云ひしに、舶來なるがゆゑ、唐サントメと稱せしを、後には單に唐棧と略稱するに至りしなり

(一五) 小絨をネルと云ふは、英語の Flannel の略訛なり

(一六) 染料にベンガラと稱する赤色の品あるは、印度の榜葛剌(ベンガラ)より來りしに因る

(一七) 洋服の上着を往時マンテルと云ひしは、蘭語の Mantel に基つく

(一八) 茶宇縞即ちチヤウシマと稱する織物は、印度の刹瓜兒(チヤロル)と云へる土地より來りし舶來の絹布に由來す

飲食の部

(一) 菓子に金米糖即ちコンペイトウの名あるは西班牙語の Confeito に由來す

(二) 卵糖即ちカステイラは、西班牙の地名 Castilla に起り、蘭語の Castell Brood に由來す

(三) 牛酪バタと稱するは、英語の Butter より轉訛せしなり

(四) 麪包をパンと稱するは、葡萄牙語のPan なり

(五) 耳藍即ちハボタンをキヤベツと云ふは、英語Cabbageの轉訛なり

(六) 南瓜をカボチヤと云ふは、初め東埔寨 (Cambodia)より渡來せしに因る

(七) 巴旦杏即ちカラモヽの一種をアメンドウと云ふは、蘭語amandelの訛なり

(八) 菓子に浮石糖即ちカルメラの名あるは、Caramel の轉訛なり

(九) 飲物にジンヽヽビアの名あるは、英語Gingerber の訛なり

(一〇)馬鈴薯をジャガタライモと云ふは、瓜哇島のバタヒアの舊名 Jacatra に由來す

(一一)洋酒にシャンパンの一種あるは、佛國の Champagne なる地名に基つく

(一二)煙草をタバコと云ふは墨西哥の一州 Tabasco に起り蘭語の Tabaco より傳はりしなり

(一三)油煎りしたる野菜料理をケンチャンと云ふは、卷繊の唐音に由來す、後にはケンチンとも云へり

(一四)榲桲をマルメロと云ふは、蘭語の Marmel 即ち砂糖漬の菓物と云へる義に基つくものなるが、當時偶々榲桲を砂糖にして舶齎せしにより、直に之を指稱するに至りしなり

(一五)雞にシャモと稱する一種あるは、暹羅國より傳はりしに因る

(一六)藥料とする番紅花即ちサフラン(洎夫藍)は、蘭語の Saffranan に起る

(一七)木の實にギンナンと稱するものは、銀杏の宋音ギンアンに由來し、音便によりてアンをナンと連稱するなり

(一八)果實の一種たるアンズは杏子の宋音なり前に記したる銀杏のアンに同し

器物の部

(一)端艇を今は英語にてボウトと謂ふも、往時は之をバッテーラと稱せしが、是れ西班牙語の Batel より轉訛せしなり

(二)劍をサアベルと謂ふは、蘭語の Zabel に由來す

(三)往時玻璃器をギヤマンと稱せしは、蘭語の Diamant 即ち金剛石なる義誤りて、玻璃に擬當せしなり

(四)裁縫器械のミシンと稱するは、英語のSewingmachine 即ち裁縫する器械と云へる語の形容詞を略して、單に器械と云へる語のみを略訛せしなり

(五)玻璃罎を往時フラッコ罎と稱せしは、蘭語の Flask より轉訛したるなり

(六)玻璃杯をコップと稱するは、蘭語のKop 即ち高脚盃の義に因る、英語の Cup 是なり

(七)帽子をシャッポと稱するは、佛語のChapeau より轉訛せしに因る

(八)紐釦又扣鈕即ちボタンは、葡萄牙語 Boton の轉訛なり

（九）洋燈の小にして粗なるものをカンテラと云ふは、燭臺の義なる蘭語 Candelaar に由來す

（一〇）骨牌即ちカルタは西班牙語の Carta なり

（一一）往時硝子器をビイドロと云ひしは、葡萄牙語の Vitreo の轉訛なり

（一二）樂器にオルゴルの名あるは、蘭語 Orgel の訛なり

（一三）玻璃をガラスと云ふは、英語 Glass の訛なり

（一四）瓶口の木栓をコロップと云ふは、英語 Cork の訛なり

（一五）松杉類の樹脂油をテレメンユと云ふは、西班牙語の Termenlina、又は英語 Turpentine の轉訛なり

（一六）物を容るゝ器に鉢即ちハチの稱あるは、梵語に由來す

（一七）徳利の一種をビンと云ふは、瓶の字の唐音なり

（一八）假面に般若即ちハンニャの名あるは、元と梵語にて知慧の義なりしを、葵の上の謠曲より誤まり傳へて、怖るべき鬼女の面相となしたるなり、又一説には、梵語にてハンツアと云ふは。怪物の義なるにより、之を轉訛せしなりとも云へり

（一九）秤をテンビンと云ふは、天平又は天秤なる字の唐音なり

（二〇）酒盃の一種を猪口即ちチヨツと云ふは、朝鮮語の鐘の字に由來すと云ふも未だ確ならず

（二一）唐人笛をチヤルメラと云ふは、胡語の哨吶に因る、後にはチヤンメラとも云へり

（二二）死をカハラと云ふは梵語なり

（二三）卒塔婆即ちソトバは梵語にして、標章又は方墳の義なり、又單に塔婆とも略稱す

（二四）施條銃をライフルと云ふは、英語の Rifle に因る

（二五）燭器にアンドンの名あるは、行燈なる文字の宋音なり

（二六）墓をランタフと云ふは梵語にして、墓地をランタフバと云ふも之に因る

（二七）湯を瓶に入れて身躰を暖むるをタンポと云ふは、湯婆なる文字の唐音なり。俗にユタンポと云ふは重言なり

（未完）



二月五日　兼題　早春鶯　（天地人の外は原稿到着順なり）

天　（無　名）

きのふけふかすみそめたる軒ばより
　こゑもにほひてうぐひすのなく

天　三河國寶飯郡牧野　丸山須磨子

春あさみゆきもきえねどうぐひすの
　なくなるこゑはのどけかりけり

地　下野栃木町　高谷菊子

うぐひすのなく音をきゝて昨日けふ
　はるのこゝろになりにけるかな

人　伊豫國北宇和郡吉田町　藥師寺芳子

春來ぬとうめのたち枝にやどしめて
　はなにれくれぬうぐひすのこゑ

こほりさへまだとけやらぬ春ながら
　いともめづらしうぐいすのこゑ　住山靜子

きのふけふ春のひかけにうくひすの
　こほれるなみたとけそめにけり　永井さい子

きのふけふさきそめにける梅か枝に
　はるをしらするうくひすのこゑ　中野八重子

春なれやふる巣を出つるうくひすの
　ひとまちかほのこゑそきこゆる　大谷友子

はつ春のはつわか菜つむそてのへに
　なくうくひすのこゑののどけさ　佐々有鄰子

きけはまたにほはぬ梅もまたれけり
　はる立つにはのうくひすのこゑ　楠[illegible]子

谷の月にふゆこもりせしうくひすも
　はる知りかほに今朝きなくなり　島田好子

巣ちかきまかきのうめにやとりけん
　はる立つけさのうくひすのこゑ　木村兼子

うくひすのかきねの梅は咲かれとも
　はる立つ今朝ははつれなそなく　野田千代子

はる立ちしるしなるらん庭の面の
　うめのこすゑにうくひすのなく　中島勝子

知られしのわかやま住もはるされは
　あさなゆふなにうくひすのなく　水島眞子

うれしくも軒はのうめのさきしより
　今朝めつらしくうくひすのなく　松原常子

かすかのの雪もいつしかとけそめて
　こゝろのとかにうくひすのなく　澤田俊子

くれ竹のふしよかるらんあさな夕な　曾山道子

はる立ちしよりうくひすのなく

うくひすの聲のなまりのとけぬこそ
はるまたあさきしるしなりけれ　溝口信子

去年の雪またとけねともはるきぬと
にはのうくひすこゑたてつなり　溝口奈保子

くれ竹のひとよのほとにはるめきて
のきはのうめにうくひすのなく　小川金子

ゆきけよりかすみそめたるやま里の
にはのうめにもうくひすのなく　神田樂子

あつさ弓はる立ちしよりうくひすの
さへつるこゑのおもしろきかな　岡田波子

春立ちてにほひそめたるうめか枝に
またかたことのうくひすのなく　芝田秀子

はるの立つけふは日かけの長閑さに
なきそめにけりにはのうくひす　荒川清子

今朝よりははるや立つらん庭の面の
うめのこすゑにうくひすのなく　溝口寛子

はるきぬと人に告ぐらんかたことに
ささなきそむるうくひすのこゑ　西村菊子

遠やまはゆきけなからにかたなかの
こまつかはらにうくひすのなく　西村登羅子

うくひすの初音みにしむあさ東風に
いつしかはるのこゝちせるかな　芝田源子

うくひすの今朝なきそめて春つくる
こゑものとかにきこえぬるかな　吉川糸子

はるきぬと今朝なき初るうぐひすの
こゑものとかになりにけるかな　荒木純子

梅はまた咲きそめねともうくひすの
ゆきのまかきにうくひすのなく　根岸英子

わかやとの軒のゆきたに消ねなくに
たにの戸出てゝうくひすのなく　町田鶴子

谷のとのこほりもいまたとけぬまに
はやうくひすはゝるをつけゝり　青柳信子

きのふけふ春にあけこしまとのとに
きしもうれしくうくひすのなく　新開みちな子

遠やまはまたかすまねとうくひすの
なくひとこゑにはるをしるらん　青柳桃枝子

里のこかわかなつむのものとかにて
はつれはるめきうくひすのなく　和田ますゑ子

春はまだ名のみ立ちにし此のあさけ
ひとり長閑けきうくひすのこゑ　太田貞子

くれ竹にやとるうくひすはるのきて
ちよのはつねをきくそうれしき　川崎みき子

はるあさみまた雪きえぬやまとの
うめのたちえにうくひすのなく　栗田口信子

さきそめし梅にきてなくうくひすの
こゑにそはるはさだまりにける　前澤幸子

すたちしてなくうくひすのひと聲に
けふこそはるのこゝちこそすれ　川島晴子

のとかにも世は時めきてうくひすも　小幡富美代子

はやはるきぬとはつねなくなり

うくひすもよにおくれじとたつ春の　小幡千代子
そらにきそひてはつねをそなく

梅はまたほころひかぬるそらなれと　山田久子
はるまちとりてうくひすのなく

いちはやくはつ音漏せりうくひすは　山田ゑい子
けさくるはるにたちもおくれす

物たらぬこゝちせられしはるにけさ　靜間みつ子
ひとつはねたりうくひすのこゑ

あさ風はまたさむけきにいちはやく　平澤ふさ子
のとけくきこゆうくひすのこゑ

春たてとまたかせさむみさきあへぬ　矢野梅子
うめのさえたにうくひすのなく

世のちりにそむる梅がかいとひけん　堀谷よし子
ゆきのこすゑにうぐひすそなく

わかやどはかきねの雪もきえせぬに　堀谷やな子
けさうめがえにうくひすのなく

山里はまた消えやらぬゆきのうちに　小町谷りね子
はるをつけつゝうくひすのなく

梅か香のにほひうこかすはるかせに　小町谷園子
たにの戸あけてうくひすのな

ふしなれの聲もうれしくうめがえに　栗田口貞子
はるしらせつゝうくひすのなく

谷おそきわかやまさともうくひすの　河野文子
けさのはつねにはるそしらるゝ

朝な〳〵き鳴くうくひすうれしくも　石川きん子
はるつけわたるこゝちこそすれ

今朝にはや春きにけりとうくひすの　石川たい子
おとづれ初むるこゑものどけし

梅のはなまださかなくに木つたひて　池谷さみ子
はるつけ初むるうくひすのこゑ

山かけのゆきはいつしかはるかせに　諸井久良子
とけてうれしきうくひすのこゑ

やふちかく家居する身はうくひすの　綃脇ます子
またとなれぬはつ音をもきく

風さむしかすまぬやまのたにの戸を　吾妻ちか子
いまやいつらんうくひすのなく

やま里もはるのしられてしはの戸に　山本いさ子
しば〳〵来なくうくひすのこゑ

梅のはなまださかなくにうくひすの　小曾根しう子
はつ音にはるのはじめをそ知る

春もまだ立ちしばかりにまさなれず　大谷津琴子
ふしおもしろくうくひすのなく

まきかれし軒はのうめにはるつけて　財田すゑ子
なくうくひすのこゑそのとけき

たつ春におくれしとなくうくひすの　武田榮子
はつねのとけきあさほらけかな

きのふけふ霞みそめたるのとけさに　眞鍋直子
はやうくひすのこゑのきこゆる

うすかすみたなひく野への梅かゝに　羽田三緒子

おくれすはるをつくるうくひす

春きぬとほゝゑみそめしうめかえに
またこゑわかきうくひすのなく　河田いし子

あしひきの山のゆきたにきえぬまに
はるきにけりとうくひすのなく　佐藤誠子

かせ寒みうめもにほはぬやまさとに
はるつけそむるうくひすのこゑ　藤林ます子

梅か枝にさくも來てなくうくひすは
はるたつけふやうれしかるらむ　土肥仙子

うくひすのはつ音なかすはやま里は
いつまてはるをよそにきかまし　三浦さき子

庭の梅もまたほころひぬ雪のうちに
まつうくひすのこゑきこゆなり　牧村ちよ子

春たてはちきりたかへすうくひすの
こゑめつらしくけさきなくなり　春野こさじ子

軒ちかきうめもにほはぬやとなれと
はるきにけりとうくひすのなく　松野みさを子

のとかなるそらのけしきも春あさみ
またさとなれぬうぐひすのこゑ　清水きく子

雪ふかきたにの戸いてゝけふはるの
たちえのうめにうくひすのなく　中川濱江子

いつのまに春はきにけんうくひすの
今朝もなきけりうめのこすゑに　重松高子

咲きそめし梅か香とめてわかにはに
はるをつけつゝうくひすのなく　久松さい子

春たてゝまた咲きそめぬうめか枝に
けふも來てなくにはのうくひす　野中あさ子

ふたつ三つはやさきそめて梅のはな
にほふと思へはうくひすのなく　南大路正子

くれ竹のふしおもしろくきこゆなり
はるまちえたるうくひすのこゑ　南大路芳枝子

雪の中にきなくをみれはうくひすの
こゝろよりこそはるはたつらめ　磯部都屋子

春はまたいくかもたゝぬわかやとに
うめをたつねてうくひすのなく　北村正枝子

軒ちかくうゑおきし梅をたつれつゝ
うくひすきなくはつはるのそら　北村貞子

我やとのかきねのうめはにほはねと
はるをしりてかきなくうくひす　北村孝子

あけ初めし春ののきはにこゑたかく
千代をことほくうくひすのこゑ　馬島久仁子

あは雪のまた消えやらぬにはの面に
はるやきぬるとうくひすのなく　長岡かなる子

雪のうちにほゝゑむにはの梅かえに
はやはるしりてきなくうくひす　松尾蕗子

なか〱になかしかりけり春あさみ
またふしなれぬうくひすのこゑ　琴陵瑞枝子

うくひすのなくねきかすは風さむく
春ともいまたしらすやあるらん　琴陵千代子

春きてもまたさきやらぬうめかえの　梶井久子

ゆきにやささふうくひすのこゑ

雪はまた消ゐやられさもうくひすの
のさけきこゑにはるめきにけり　名取正代子

うくひすの春つけそむるひさこゑに
このまのゆきはしたさけにけり　山崎静子

うくひすら去年はこゝろの習れけん
こさしはゆきなうめさみてなく　中窪ふく子

春つくるこゑものさかにきこゆなり
またささなれぬたにのうくひす　土岐米子

ゑみそめし梅のこすゑにうくひすの
かたなりなからはるなつけけり　楠瀬兎女子

あつさ弓はるのはつかせさそひけも
ふるすなからにうくひすのなく　中村のふ子

昨日まてゆきにこもりしたにの戸な
いてゝもなくかはるのうくひす　鈴木美惠子

我やさのうめははるなもしらぬまに
さくも來てなくうくひすのこゑ　牧野晧子

わかやさの梅はさかれさはるくれは
さきしりかほにうくひすのなく　進藤元子

みやひなの友にかたらむうくひすの
はるのはつ音なわれはきゝつさ　牧野澤子

春もまたあさきしるしかなくこゑの
さゝのひかれしたにのうくひす　廣田さめ子

山のはもかすみそめたるこのあさけ
きくものさけきうくひすのこゑ　林久子

うくひすゝ谷のふるすな立ち出てゝ
ゆたけき御代のはるに鳴くなり　島津倪子

里なれぬれこそなかなかなかしけれ
はるつげそむるそのゝうくひす　高田ささ子

梅のはなまたほころひぬにはの面に
ひさりさけたるうくひすのこゑ　清野孝子

春たてさまたうすらひのにはなから
はつ音うれしきけさのうぐひす　星野かず子

吹く風はまたさむけれさうくひすの
なく音にしるきはるのうらかな　大橋てい子

春きぬさおもへはやかてきのふけふ
はやうくひすのはなになくなり　碓井信子

梅か香もいまたにほはぬそのさきに
さくはるつけてうくひすのなく　碓井武子

梅か香にはるうこくさや皆くるらん
なくうくひすのこゑそきこゆる　田中さみ子

あら玉のさしたちかへるきのふけふ
はるつげそむるうくひすのこゑ　大堀栫子

昨日けふにほひそめたるうめかゐに
はやくもきなくうくひすのこゑ　降田槇子

いかなれはきのふな春さおもひけん
このうくひすのはつ音きかすに　阿比留鉄子

またあさき春にはあれさ打ちさけて
まつ來なくなりたにのうくひす　山形くま子

かすみさへまたたちそめぬ春の色な　小山たけ子

いかにしりてかうくひすのなく

雪の中にはる來にけりさけまははや
たにのといてゝうくひすのなく　小山せき子

あつさゆみ春のはしめはうくひすの
こゑも日かけものどかなりけり　住山幾子

いさはやも春はきにけりのとかなる
はつうくひすのこゑをしるへに　甲斐莊優子

梅か枝のゆきをはなとやまかひけん
はるまたあさくうくひすのなく　岩城まつ子

冬のうちに梅咲きぬれはおくれしと
はる立つ今日はうくひすのなく　山本きよ子

進みゆく御代をいはひてうくひすも
けさかどまつのうへになくなり　大海原芳子

きのふけふほころひそめし梅か枝に
はやおとつれてうくひすのなく　佐藤せき子

うすかすみ棚引きそめしあさ戸出に
きくものとけきうくひすのこゑ　德永萬壽子

梅か香はまたにほはねとあつさゆみ
はるつけかほにうくひすのなく　佐藤ゑん子

うくひすのなく聲すなりきえやらぬ
ゆきのうちにもはるやたつらん　島山千代子

あらたまの年たつやかてはる來とか
にはのうくひす今朝そなくなる　島山ゆき子

春の色はまたみえわかぬわかやどの
かきねのうめにうくひすのなく　靑木春子

あは雪をこすゑのはなとおもへはや
はるまたあさくうくひすのなく　小松さだ子

たつ春をけさそ告くなるうくひすは
なにゝしいてかふるす出てけん　佐々貫芙蓉子

やま里もはるは來にけむ雪のうちに
うめをたづねてうくひすのなく　高橋小辻子

二月五日　兼題　ゆかしきもの

天

播磨龍野　眞鍋直子

みやびやかに住居なしたる柴のあみ戸よりなつかしう梅の匂ひ來る月さやかなる夜は糸竹をならべあはせたるなどいとゆかしきまた父母によくつかへたるはらからの互にいつくしみあひたる若き妹せのいとむつましきなどうちきくたにいたくゆかしきまして學のわざ何くれの事に勝れたる女のいとようつゝしみてたかぶらぬこそたとしへもなくゆかしけれ

地

岡山縣岡山市八番町　降田楨子

花がめに梅の折枝さしたる靜かに住みなしたる家居敷島の道たどる人美はしう書きたる筆のあと女のはことに其心も推しはかられてゆかし言葉少なくつゝしみふかき女學の道にわけ入り萬の事心得たる女のしたりがほせでにこやかにつゝましげにうちふるまひたる古の

紫のおもとの事もしのばれていと〳〵ゆかしまいて舅姑夫などにもよく事へ家の事よくまかなふときゝたるころゆかしさも一しほまさりてこよなうめでたけれ

人

大阪市北區相生町百六十二番邸　梶井　久子

ろばふる雨夜のもの靜かなるに釜の音の高くひびきたる月あかき夜のをかしきに琴はのかにかきならしたる梅さく宿のきよげなるにろうたきのかをりあひたるなどはいかなる人のすさびにかゝとすずろに見まほしうもれもはるゝよされどこれらはものゝすゑなれどまた思ひのぞむるかたもあれど位つかさひくきにはあらでたかぶらずすべて物ごとやはらかにてなさけ深き人あるは人をかしこくればしたてられたる母ぎみあるはもの知りたる女の辭すくなにさる色をけしきにも見せぬなどころいともいともゆかしきものゝかぎりなれかし

佐々有鄰子

春は花秋は月夏は郭公冬は雪などとりいでゝ思ひくらぶればみなひときは心ひかるゝものからそれと品さだめかねつるに立かへりくる年のはじめに女兒のよき衣きたる小學生の朝とく起出てかねてしらぶる讀書を聲ほがらかに打あげて朝げの膳部もわすれはてゝふく讀によねんなく机にむかひ居ゐるもいといとゆかしきもののきはみになんありける鶯の聲よりも一しほにこそ

田　貞子

琴のおと笛のね神樂のわざ讀經の聲何れもゆかしさるべくも見ぬ人の歌直したるむつかしき家の小床に名ある人の軸かけたるなどまたゆかしさしも見ねざりし人の思ひ立事ありてとみに世捨てつるなどきくいとゆかし小柴垣などもよしありげなる家の奥に幼なき聲してふみ讀みたるこもまたしかなりわきて女などの常には言葉少ななるがやむごとなき折につけつゝ禮義文學管絃の道などおくれずものしたるいとも〳〵ゆかし

寄山祝　島山千代子

ひさかたの雲井にたかきふじの根は
君が八千代のかげにぞありける

新年雪　河野文子

さしたつさ雪のふるすをたちいでゝ
こゑあたらしくうぐひすのなく

原上霞

雪にたにうもれざりしをはるかすみ
けふ立ちかくす三保のまつはら

遠村柳　常盤國子

かすみ立つ山根のさとをながむれば
いさものさかにけふるあをやぎ

故郷友　島津信子

むかしわが友とたまひしにはの面は
あさ茅がはらとなりにけるかな

早春柳　仝

あを柳のみどりもふかくそめいでゝ

のどかにかよふはるのあさかぜ　彦坂尋子

立春

天の戸もゆたかにあけて四方に立つ
かすみそはるのしるしなりける　仝

仝

山の端にまたきえあへぬしらゆきを
かすみへたてゝはるは來にけり　仝

いつよりも今年はわきて世のひとの
こゝろなゝしきよろつ代のはる　仝

冬里

たえ〳〵になひくけふりも夕こりの
くもに見まかふふゆのやまさと　静間みつ子

仝

浅茅生のうやらのさともかれはてゝ
ふゆのあはれはふかくさのさと　仝

望遠帆

浪にきえなみにうかひておきとほく
みゆるほかけやあまのつりふね　町田鶴子

氷始解

岸あらふみつおとすみてきこえけり
小かはのこほり今朝やとくらん　神田錦子

春雨

たま水ののきはにおつるおとなくは
ふるともしらしよはのはるさめ　大島愛子

梅花盛

いつかたに杖をひかましこのころは
うめのさかりのたよりのみきく　芝田源子

浦松

いつのよにたか種まきてこのまつの
名もたかさこのうらにおひけん　神田靜子

早鶯

小草たにまたいろ見えぬにはの面に
けさうくひすのはつ音をそきく　根岸英子

寄歌祝

大みよのめくみのつゆにことのはの
はなはいくよもさきにほふらん　野田千代子

夕春月

咲きつゝく花のくもまをもれいつる
つきおもしろきはるの夜半かな　木村鯱子

北白川の宮の薨御ましましゝをかなしみて

かしこくも雲かくれにしつきかけを
あふけはたかきいさをなりけり　小町谷里江子

寒夜月

ちりつもる庭のおちはにしも見えて
つきかけさゆるふゆの夜半かな　諏訪晴子

新年鶯

あら玉のとしたつけさはまさの月を
あくるをまたてうくひすのなく　仝

枯野　　諸井くら子

淺茅はら尾はなすゝきしもかれて
いろなき野邊となりにけるかな

炭竈　　仝

山めくるゆきけのくもと見ゆつるは
たくすみがまのけふりなりけり

年の暮に思ふ事を　　矢野うめ子

冬立ちぬるより寒さのきはやかに覺ゆるのみか大空にすめる月のかげさへうつる池の水と共に氷れるなど一きは心細くてなむされど流るゝ如く過ぎ行く月日はとゞこほらで今年もはや殘れる日數は片手にて數ふる許になりぬ常にだも繁なす事繁き都なるに年の末とて來ん年のいとなみに忙はしくて人々は彼方此方にはせめくり行來の人もて道ふたがれる中を賤の男の聲も勇しげに松ひさぎありく　なといとなかしおもへば年の始に今年こそ今年こそはと誓ひし事の十が一つもなしゝぬに年ははや暮れなむとす　あはれくちをしといふも中々なりやされどとすがに新らしき年を迎へむ事も　また嬉しからぬにはあらじと思ふはいまだ幾夜ねてなど言ひし　むかしの幼なむの消ゆやらぬにや

兼題

二月二十日　歌……遠山霞
　　　　　　文……紀元節

三月五日　　歌……歸鴈
　　　　　　文……野遊

●きこにまるらす

一原稿はすべて、書さざま正しかるべし、文字のみだれたる、住所姓名のもれたるはとらず。

一兼題歌文は、ことに變体がなを用ひず、一字々々分明にしるさるべきこと、又歌一首の上に、上の句の中に二ころの漢字一字を用ひ他はみなかなを用ゐらるべし。

一必半紙を用ひて十六行、二十四字詰なるべきこと。

一毎紙、國郡、町村、番地、姓名等つむらかにしるさるべきこと。

一五日兼題は前月廿五日二十日のは、その月の十日までに本社にとゞくやう御送りのこと、遲れたるはとらず。

ゝやかにうつくしさ、なでしこの露にみだれたる心ちに、我をおもひ出て、かくひとりしをれてはあるらん、とうちつけにあはれなり。今宵の月におどろかし給はぬうらみも、戀しさにまけて、さはりぬといへど、母もあはれと思ひつまじくかたらひける。御前には御あそびせさせ給へど、めす事もあらじ、あらはなる所はつゝまし、しづかなる方にいざ給へといへど、さそふ水にひかれて、おと姫うちつれ行道にて、人々み給て、のら猫にやあらむとて、姫をいだきて御前に行給ふよも太郎名殘かなしくかへりみがちに、我住方にかへり侍けり。

人々此御猫はいわけなき時より、御まへにのみさぶらひて外はおそろしき事におもひたるに、此頃はよも太にひかれて行ましき所へ行て、夜もすがら尋ねあかす事ありと、御あづかりの人々もわぶめり。猫なども友にひかれたましひかはるにやあらん。よも太はにくからねどおとをいざなひ行ぞいとおそきとの給へど、よものぬしも御前にめし出るをかしこき事とはおもはで、何の床しき事ありてむづかしげなるさうしに、我をるだにあるに、上の御ねこまでいざなひていとあしき心哉と、いみじうむつがられて、今よりは我ゆるさんまで、御前にもさいかなまして上の御猫共

と友なふ事なかれとの給へど、うちひそみたるまみもいとをかし。唐は此事を聞にいとぞやすからず。年月なべての猫にはゆるさじとおもひあがりしむすめに、玉にきずつきたる心ちして、姫をもなき物におもひなし召にや、なさむかたはらにこめおかんとまでいひて、いみじうさいなみける。やがてよも太がかよひ路にも猫をすゑてまもらせければ、しやうそこをだに取いるゝ事もかたし。又ことかたに道もがなとかたみに思ひみだるゝさまよそのたもとも露けし。我子のろできとわかきどちにて何事もへだてなく云かたらひあしがきのへだても近ければ、我も時々花紅葉に付物なども云かはしければ、此忍ぶのみだれのあはれはしらずがはにも過しがたくて、ろできにかはりてよめる。けし

かはるべき事をぞ思ふ君が名の
立初ぬるを身のとがにして

返し　　　　　　　　よも太郎

とりかへす物ならなくに身のとがの
くひのやちだひれつるなみだか

墨うすく書きまぎらはしたるもをかしとみえし。よも君は戀のふち瀬にわり立て、袖のみぬらすあま小舟こがれて物を思ひけるかは
に、にく氣なるむくつけ猫の父母さゝげ物にしてかしづくむすめを、かくあやまちて逢ふ事かなはずとわびたるさまをみど、いかにをこならんよもはうちしめり思ひくづをれたるさま、いとゞしくあはれにて、戀するわか猫のはんにもせまはしく、色なる女猫共は身にしむ斗めであへり。いかなるつみもみるにはゆるしぬべき様なり。なは思ひあやまれる折にや、かくひとりごちける。

あはてふる涙の雨の袖の露
むすびろめたる中ぞくやしき

女もいみじう思ひむすばれて、みるにさすが心くるしくや有けん、いかにもして男の事忘るゝわざせよと、唐君めのとの女房にいひけれど、さうけ給ひぬとてわと姫に言やう、『今はよも君の事ればしてもやくなき御かた思ぞかし此頃のほどにいつしか物給ふ方へ出まうでつ』といへど、まことしからずはわもへど、たのみがたきは男の心といへど、さもやとさまぐに思ひみだれたる折しも、みのきとて心しりの

わらはが本までよも太郎より。

秋風の吹に付てもおどろかじ

給はぬよとて吹すさむ音も

身にしむ戀草の露みだれあふよもの秋風

返し

誰ゆゑにおもひみだれて我方に

音づれもせぬよもの秋風

月草のうつろひ安き御心ともしぞ契りし事もはづかしくなど言おこせけれど、いかなる後なき事を聞給ふらん、忘れんとてのかことにや、かく朝夕戀ひわび、今はいのちもあやふく成ぬとて

あはれとは思ひも出じ君により

身はあさちふの露ときゆとも

返し

我ゆゑと思ひなさんもあさぢふの

露には袖をぬらさざらめや

めのとが言し事は後なき事としれけれど、ねと姫より、

うらもなく君もねもはゞ戀しさを

ねなじ思ひとなぐさみやせん

心とけたる返しをいとうれしく詠みける。

とかくして月日暮、あくる春のあしたは頼ならぬ猫の身なれど、ねはやけ船に年の初の祝申にとて、男女うちつれ、諸友に行をみるにも、よもは我のみこも山鳥の心ちしてさう〴〵しくうちしめりゐたり。友の猫共言やう何のあけひわざも此君心に入給へど萬はへ有しに、ねと姫のさわがれの後、はかなきまり小ねずみにも心とめ給はず、物くはへなくいとゞこそさう〴〵しけれ。ねと姫を此君にゆるし給はで、こと猫にあはせ給はゞ一ちやう世をろむき給はんずらん。さもあらど世の色好の猫の光うせなん。けし御前はとをかしき御中なれど、ねやたちにも申させ給へかしと、我子のろできしていはせけれど、我もあはれとねもへど、思ふはいたがひたるとてよも君の事はかのあたりにめざましく思ふ也。されどねばろ氣にてはかなふまじ、母

のみけ殿に申てみんといへど、ろできよろこぶ事かぎりなし。やがてけし君みけ殿に行初よりのあらまし語けれど、母のみけ聞きて我は夢かもしらず、此頃若猫の言しは、よもはいみじう時めき給しが、今は御前にもめし出ず、うらやましとは何れもひけん、我らはいつもかくてぞよき。咲てとく散物思もなしと言さゞめきしかど、わかくはやりたるまゝに、上の御鳥籠などに目をかけて末どしの御かしこまりかと思ひて問きく事もなかりしが、さは船のうらみにて御前をさへさけけるや、唐君をこれるとや、世にいはむ、さらど我行て、たが為も猫はらはれにならぬやうにせんとて、けしとうちつれ唐君が本へ行ける。母上姉君にはしぬとて、悦もひなしたり。物語のついでにれと姫の事言出で、今は立初ぬる名の取かへすべき事かは、たゞまげてゆるし給はんぞ誰ためもよかるべき。すべてすぐせ程心にかなはぬ事はなし、君は我子の中にてかはかたちすぐれたる名高、もろこしまでも聞て獅子の后にまゐらすべきちよく有、一門の物大に悦、虎はねこのゆかりなれどさせるかへりみもなし、或は山猫とゆかりなりとて、やゝもすれど猫にみめみせてやすからぬ事あり、獅子主をむこに取なむもろ〳〵のけだ物にれそれうやまはれんとぞ、家の風吹

ぬべき時いたれりと悦び、むすめを唐の御門に奉る事太しよくわんのれいぞかしなど思ひ、いかめしき幸なとうち付に唐姫などよびて悦しにれもひもよらぬ名もうとましきのらのぬしにみえ給ひし時の、いかむかりはいなくくちをしかりし事言つくすべきならず、さりぬべきすぐせにや子共あまた持候へど、むこのめざましも、れのづからゆるされし、我身に思合てもとくよも太にゆるし給へとの給へど、唐もことはりとや思けん仰にまかせ侍るよし言ける。みけ殿悦給ひてかたる事はのび〳〵にてはあしく、とくとそゝのかして帰り給ふよも君にかくとつげゝれどよろこぶ事かぎりなし。したがふ猫共今よりは漸々世にまじらひ、はれ〳〵しく成給はんと悦もことわり也。いつしか姫君むかふるいろぎしける。女方にもいみじうしぶらしげる中なれど、てう度などにもいとゞきよらをつくしたる。れど君も中空にいかに成行なむとわびしくれもひしに、いとうれ敷れもふ。二月晦日よき日とさだめける。すでに其日に成ぬ。よも太郎にはさまゞゝきよらをつくしける。いかむかりうれ敷や有けん、ひるつがたよも君より我方へ中絶し涙の川にしづみしに

あふせをわたす事ぞうれしき
うごきなき岩間の氷春風に
とけてうれしき暮をまつ哉

あふせをわたすはしと成し悦いかゞ書つくさんなど有けれど、此事我申なしにもあらず、みかはの花とみね給へど、誰がよろにはみたてまつらむと皆侍りて、

花櫻さかりに匂ふ此頃と
いはまの水もいかゞよどまむ

女方にて一門の猫いたちてきよらをつくして、其夜のゐのこくむかりにやかしつき入たる。ねと姫は此頃のあはぬうらみにや、少れもやせたるも中〳〵みまほしさまさりて、かたみに思ひかはし、あならまほしきさまり。いつしかみけ殿藏人はゝ君我らにいたるまでよも太に行て、高砂尾上の松の久しきためしを引て悦を言ふ、むこ君をみれど此頃さかりにねびとくのび、あいきやうつきあなめでたとみねし。藏人唐君目ざましさは、いづち行けん、我むすめにはかゝる物をならべてこそみるかひあれと詠ける。めのとやうのふるこたち猫共はきよげなる男の御さまや我たから

西村茂樹翁序　三輪田眞佐子著

女子處世論　全

●定價　金貳拾錢
●郵稅　金四錢
●郵券代用一割增
但一錢切手に限る

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化導の良績夙に女子教育社會に推重敬服せらるゝは敢て贅言を要せざるなり先に女史我が國婦女子に本分の在る所を示さんとして女子之本分の著ある本社之を世に公にするや再版三版忽ちに賣盡し四版の成るを告げたり世間高評の重き知るべきなり女史今又本書を著述し女子處世の心得を說く温厚着實を旨とし其の理義を丁寧反覆す世の婦女子たる者坐右一日も缺くべからざるの良書たり請ふ續々御注文あらんことを今左に其の目次を掲げぬ其の詳細は本書に就きて見られよ

目次

發行所
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
（電話番號一九四六）
國光社

女鑑第百二號目録

（明治二十四年八月八日内務省許可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強て領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑
每月五日廿日發行

定價		
一冊	十錢	
六冊（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢	

明治二十九年十二月四日印刷
同　年十二月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所（電話番號一九四六）　國光社

（印刷所　[illegible]）